

日本記者クラブ会報

公益社団法人 日本記者クラブ 〒100-0011 東京都千代田区内幸町2-2-1 日本プレスセンタービル TEL. 03-3503-2722 <http://www.jnpc.or.jp/>



80歳 山に感謝

エベレスト登頂を果たしベースキャンプに戻った三浦雄一郎さん
5月26日／ネパール 撮影：早坂 洋祐(産経新聞写真報道局)

2013年度日本記者クラブ賞 受賞のことば

小山鉄郎 共同通信編集委員兼論説委員
特別賞 山本美香さん
佐藤和孝 ジャパンプレス代表 …2、3ページ

再任にあたって 吉田慎一理事長 …5ページ
「記者ゼミ」始まる 吉田克二特別企画委員 …8ページ

14	13	12	11	10	9
平野克己	横倉義武	伊藤誠	マウラー	堀江正彦	申珪秀
アジア経済研究所上席主任調査研究員	日本医師会会長	TICAD V 担当大使	ICRC 総裁	地球環境問題担当大使	駐日韓国大使
					JA 全中会長
					萬歳 章
					尾身 茂
					新型インフルエンザ等対策有識者会議会長
					ハフィンソン
					ザ・ハフィンソン・ポスト創設者
					プレジデント兼編集長
					佐々涼子
					フリーライター
					ポリビア外相
					クラブゲスト

20	19 18	17	16	15 14
富士吉田発	ポストンマラソン・テロ事件	「犠牲と教訓」テーマに	被災地通信	段躍中
富士山世界遺産へ	日本テレビ	いのちと地域守る	宮城県	日中交流研究所所長・日本橋報社社長
山梨日日新聞	近野宏明	河北新報		三浦しをん
樋川義樹	飯田裕美子	武田真一		作家
				マルズーキ
				チュニジア大統領
				野口英世アフリカ賞受賞者

25	24	22	21
親友サム・ジェームソンさんを偲んで	私が会った吉本隆明さん	書いた話 書かなかつた話	出雲発
G・ヒールシャー	思想の巨人のたくまざるユーモア	労働記者30年労働地盤沈下のワケを読む	出雲大社
	細田正和	山路憲夫	平成の大遷宮
			山陰中央新報
			山本洋輔

▼付録 2012年度事業報告(要旨)

2013年度
日本記者クラブ賞



共同通信社提供

版資本はほぼ東京に集中し、そこでは頻繁に文学賞のパーティーがあり、作家や評論家、編集者と歓談することができた。そういうことがほとんどなくなるというのである。

だが待てよ、これは逆にチャンスではないかと思つた。作家や編集者たちに出版直後の本について、慌てて感想を述べる必要がないの

を書いてみたいと思ひ、編集委員室への異動を希望して東京へ戻つたが、同室で命じられたのは「世相漫画」の担当だった。正直「漫画担当か」と落ち込んだが、付き合つてみると、漫画家たちは言葉を使わずに絵だけで時代の喜怒哀楽を表現している素晴らしいプロばかりだった。

私も漫画家たちに刺激され、漢字学の大家、白川静さんに弟子入りして、連載企画「白川静さんに学ぶ漢字は楽しい」を始めた。これは漢字の体系的なつながりを漫画的イラスト

春樹論を書く機会にも恵まれた。村上春樹という作家は日本人の作家である。その村上作品を日本社会との関係の中に位置付ける仕事に記者としてできたことは正直うれしい。その村上作品が今世界中で読まれている。それは日本人の一つの可能性を示していると言えるだろう。

また白川静さんによれば、「西洋」という言葉と対になる意味での「東洋」という言葉は日本にしかないものである。白川さんはそこに日本人の思考の一つの可能性を見ていた。私が担当し、報道してきた文学の世界も漢字学の世界もとても小さな世界だ。だがその小さなところからでも日本が見える。世界が見える。今後その小さなところから日本社会について書いていきたいと思う。

小さなところから

村上春樹や白川静の世界に見えるもの

小山 鉄郎（共同通信編集委員兼論説委員）

1989年秋、村上春樹さんの長編『羊をめぐる冒険』が英訳され、米国で初めて刊行された。全米の多くの新聞が取りあげるほどの見事な世界デビューだったが、その米国でのオーサーズツアーから帰国したばかりの村上さんを取材したことがある。その時、米国での評判ぶりを聞く前に、彼は「日本語で書くということ、日本とは何か、日本人とは何かを考へることですよ」と答えた。

振り返ってみると、この言葉に接したことが、私の村上春樹作品への理解の出発点だったかもしれない。

それから10年後、大阪文化部に異動となった。部長兼デスクの私と他に記者二人という小さな小さな部がある。その大阪勤務は実に楽しいものだったが、だが文学を専門とする記者には少々つらい面もあった。出

だ。私は取材の中で気になっていた本の数百冊を単身赴任先の家に運び、在阪の3年間にすべてを再読してみた。

その中に多くの村上作品が含まれていたのだが、それをじっくり通読して、村上春樹という作家がデビュー以来、一貫して明治以降の近代日本の問題への歴史意識を持ちながら書き続けていることが分かった。

村上春樹を再度取材してこのこと

トを媒介にして分かりやすく紹介したものである。当初は子どもたちに向けて始めたものだが、幸い非常に幅広い多くの読者を得た。漫画担当でなければあり得ない仕事なので、つくづく人生分らないものだ。

そして年来の計画だった村上春樹については私が60歳定年を迎えるまでの1年間「風の歌 村上春樹の物語世界」という企画を毎週連載することができ、その後、何冊かの村上

こやま・てつろう 1949年群馬県生まれ 一橋大学卒 73年共同通信社入社 84年から文化部 現在は編集委員室編集委員兼論説委員 2010年『村上春樹を読みつくす』を刊行 漢字学関係では「白川静さんに学ぶ 漢字は楽しい」が10万部を超えるベストセラーとなる 続編の「白川静さんに学ぶ 漢字は怖い」とともに新潮文庫になり『漢字は楽しい』は10年夏の「新潮文庫の100冊」にも選ばれた 他に『白川静 文学学入門 なるほど漢字物語』あのととき、文学があつた―「文学者追跡」完全版」など



▲ご家族勢ぞろいでお祝いに 小山さんと吉田理事長(右から2番目)は高校の同級生 学生新聞をつくった仲間だった



▲山本美香さんのご両親・山本孝治さんと和子さん 佐藤和孝さん(中央)と並んで

ジャーナリズムの歴史に 生き続ける

特別賞
山本美香さん

受賞の知らせを受けたのは、バグダッドで取材中の時でした。ポーン・上田記念国際記者賞特別賞(2003年)の知らせを受けたのもバグダッド。何か因縁めいたものを感じるのですが、今回違うのは、山本美香本人が、いなかったということです。

賞をいただいたことを彼女は、どう思っているのだろうか。僕は、確信しています。この賞を与えてくださった選考委員、理事の皆さまの報道に対する思いが、

必ず彼女に届いていると。彼女と共に17年間、アフガニスタンをはじめボスニア、チエチエン、ウガンダ、イラクなど世界の紛争地帯を取材してきました。世界で何が起きているのか。大切な命が、誰にも知られず踏みにじられ、奪われていく現実を多くの人に知ってもらいたい。

我々が、取材してきた現場では、爆弾が降り注ぎ、砲弾がさく裂し、銃弾が飛び交い、村は焼き討ちに遭い、街は、廃虚になっていました。戦争の一番の被害者は、社会的に弱い



アフガニスタンの米軍前線基地の宿舎で (2009年8月/筆者提供)

立場の女性や子どもたち。彼女の視線は、いつも最前線で戦う兵士よりも女性や子どもたちに注がれていました。戦火の中で両親とはぐれた少年の孤独。目の前で、父親が撃ち殺され、心に消えることのない傷を負った

少女。誘拐され、無理やり兵士にさせられ、人を殺さなければならなかった少年の心の闇。逆境の淵でもがき苦しむ少年や少女、そして大人たち。

彼女が伝えたかったのは、そういった不条理に立ち向かう人間の逞しさではなかったのか。彼女が、いなくなつて10カ月がたとうとしています。もつと2人で、現場に行こうと話していました。もう、2度と同じ風景を2人で見ることができません。しかし、この賞をいただいたことで、彼女がジャーナリズムの歴史の中で、生き続けていく。山本美香に生きる機会をくださったことに感謝します。

ジャパンプレス代表 佐藤 和孝
やまもと・みか▼1967年北海道生まれ 山梨県都留市で育つ 96年からジャパンプレスに所属 アフガニスタン、イラクなど世界の紛争地帯を長く取材 2012年8月20日 内戦中のシリアで取材中に銃弾を受けて死亡(享年45)

5月30日午後5時半から日本記者クラブ賞の贈賞式と会員懇親会が10階のレストラナラスカで行われた。同日午後の理事会で再任された吉田慎一理事長から、日本記者クラブ賞の小山鉄郎さんに表彰状と副賞(プラチナ製記念メダル)が贈られた。小山さんはあいさつの中で文芸評論家と文芸記者の違いに触れ、「文学者や作家に会いに行き、そこで語られた言葉や沈黙、空気も含めて伝えるのが文芸記者」と語り、これからも

現場を大切にしていける記者でありたいと抱負を述べた。特別賞・山本美香さんへの表彰状と副賞(クリスタル製の盾)は、山本さんと取材を共にしたジャパンプレスの佐藤和孝代表が受け取り、思いをかみしめるようにあいさつした。「先月の会報で『スターでも女神でもない。仲間贈る賞だ』と言っていただけことがうれしかった。この賞をいただくことで山本美香は生き続けることができます」

第82回総会
クラブ賞贈賞式
会員懇親会
5・30



▲左から橋本五郎企画委員(読売)、熊坂隆光産経社長、小林一博元東京論説主幹、粕谷賢之施設運営委員長(日本テレビ)



▲理事会で名誉会員に推薦されることが決まった斎藤史郎前理事長(中央)と再任の吉田慎一理事長(左)



▲好評だったローストビーフ 黒須シェフ自ら磯村尚徳さん(元NHK)にすすめる



▶「久しぶりだね」話が弾む、産経の元中国総局長・伊藤正さん(左)とワシントン駐在客員特派員・古森義久さん



▶この日がお披露目だったクラブオリジナルワイン「白も赤もなかなかいいですね。ラウンジのカウンターへ行く楽しみが増えます」と諏訪正人さん(元毎日)



▶クラブ賞の贈賞式・会員懇親会が初めて10階レストランアラスカで開催された163人が参加

第82回定時社員総会(宴会会場)

日本記者クラブの第82回定時社員総会が5月30日午後3時半からクラブ宴会場で行われた。出席社員8社、書面議決社員103社、計111社の出席をもって成立(定足数63社員)、定款25条により、吉田慎一理事長が議長になり開催された。

2012年度事業報告(今号付録)、同収支決算(7頁参照)を理事会案通り承認した。

続いて第21期役員の選任に移り、役員選出委員会の原案通り理事29人、監事3人を選任した。

第535回理事会(大会議室)

定時社員総会で選任された新役員による理事会が引き続き行われ、理事長に吉田慎一氏(朝日新聞)、副理事長に飯塚浩彦氏(産経新聞)、石田研一氏(NHK)の両氏、専務理事に中井良則氏(日本記者クラブ事務局長を兼務)の4氏を再任した。さらに総務、会員資格、企画、会報、施設運営の各委員会委員長を5ページのよう

に委嘱することを決めた。吉田理事長から前理事長の斎藤史郎氏を理事会として名誉会員に推薦したいとの提案があり承認した。

再任にあたって

報道「インフラ」広く深く

理事長 吉田慎一

5月30日の総会・理事会で、再び理事長をお引き受けすることになりました。

日本のジャーナリズムは、「3・11」以来、その力量を問われ続けています。折りしも日本記者クラブは、その直後に「公益」社団法人として再スタートしました。この2年間、早期復興や行き詰まった政治経済の突破口を求め、空前の規模で会見などの企画を展開し続けています。クラブ賞特別賞などの形で会員以外にも活動幅を広げる一方、デジタル時代に対応する無線LANの全面展開など施設整備も急ピッチで進めました。

報道人の活動・発信の拠点としての機能を強化し、岐路に立つジャーナリズムの新しいあり方を模索する「公共基盤(インフラ)」たらんと全力を挙げてきたのです。

これからの「インフラ」路線を、新理事・監事の皆さんとともにさらに「広く」そして「深く」推し進めたいと考えています。

世の中の難問のほとんどは、もはや既存の枠組みや伝統的発想で解答を見いだせなくなっています。新地平を切り開くには、クラブに集う人

材も、会見招待者や企画が扱うテーマも、格段と幅を広げ、より多様な異質な知恵や識見が化学反応を起こす場が必要です。目指すべきは、現役世代の参加や新企画への挑戦など、将来をにらんだ「インフラ」です。

一方で深い専門性は報道に欠かせない「質」です。しかし多忙な現場では腰を据えた勉強の機会は少ないものです。クラブの研修機能の拡充などで、より体系的な専門性を獲得し、かつ会員同士も切磋琢磨できる「インフラ」も増やしたいと思っています。

すでに4月から特別企画委員制度を設けて、こうした「広く」「深い」企画や活動に乗り出す準備を進め、1つの試みとして現役を対象にした企画を準備中です(8頁参照)。

言うまでもなく私たちの唯一のエネルギー源は会員と現役記者の皆さんの行動力です。クラブが、新ジャーナリズムのインキュベータとなるかどうかは、皆さんの参加ぶりにかかっています。引き続きのご支援と奮闘をお願いいたします。

(朝日新聞社上席役員待遇
コンテンツ統括・編集・国際担当)

第21期役員(2013・5～2015・5)

*役職は5月30日現在

◆ 理事長(再) 吉田 慎一 朝日新聞社上席役員待遇・ コンテンツ統括・編集・国際担当	山浦 修 西日本新聞社執行役員東京支社長
◆ 副理事長(再) 飯塚 浩彦 産経新聞社取締役東京編集局長	鳴海 成二 東奥日報社取締役東京支社長兼大阪支社長
◆ 副理事長(再) 石田 研一 日本放送協会専務理事・放送総局長	佐藤 純 河北新報社東京支社長
◆ 専務理事(再) 中井 良則 日本記者クラブ事務局長	中野 智己 福島民友新聞社役員待遇東京支社長
◆ 理事・総務委員長(新) 伊藤 芳明 毎日新聞社常務取締役・主筆	濱中 豊和 北國新聞社東京支社長
◆ 理事・会員資格委員長(再) 小田 尚 読売新聞社専務取締役論説委員長	金子 秀聡 熊本日日新聞社東京支社編集部長兼論説委員
◆ 理事・企画委員長(新) 会田 弘継 共同通信社論説委員長	玉城 常邦 琉球新報社東京支社長
◆ 理事・会報委員長(新) 石川 一郎 日本経済新聞社常務取締役	西野 智彦 TBSテレビ報道局長
◆ 理事・施設運営委員長(新) 粕谷 賢之 日本テレビ放送網報道局長	箕輪 幸人 フジテレビジョン取締役報道局長
◆ 理事 谷 定文 時事通信社取締役社長室・マスメディア担当	北澤 晴樹 テレビ朝日専務取締役
山田 哲夫 中日新聞社論説担当兼東京本社論説室論説主幹(役員待遇)	武田 康孝 テレビ東京上席執行役員報道局長
佐藤 剛 北海道新聞社東京支社長	川畑 年弘 読売テレビ放送取締役東京支社長兼東京営業局長
	多畑 修二 札幌テレビ放送東京支社長
	松田 健 中国放送東京支社長
	川嶋 明 日本新聞協会事務局長
	木村 信哉 日本民間放送連盟専務理事
	梅田 光男 日本プレスセンター専務取締役
◆ 監事 佐藤 典 秋田魁新報社東京支社長	
面出 輝幸 神戸新聞社東京支社長	
大久保太郎 ニッポン放送編成局報道部長	

多彩なゲスト ニュース発信増す 12年度事業報告、決算を承認

5月30日の社員総会に2012年度の事業報告が報告され、決算も承認された。第21期(2013年～15年)の理事29人、監事3人も選任された。日本記者クラブが主催した12年度のプレス会見は計188回で、11年度に次いで多い回数を記録した。決算では、収益(収入)は減少したが、費用(支出)も減少したため、一般正味財産は11年度比635万円増加し7億8103万円となった。会費収入の減少傾向が続く中、多彩なゲストを招きジャーナリズムの基盤としての役割をさらに強めた年度だった。

今号に事業報告の要約版と正味財産増減計算書、貸借対照表、役員名簿を掲載した。収支計算書などはウェブサイトで公表した。

主催行事に延べ1万5000人

プレス会見は記者会見、昼食会、研究会、討論会と呼び方を使い分けているが、いずれもオンザレコードの取材・報道の対象となる。東日本大

震災後の11年度は201回と最多だったが、12年度もそれに並ぶハイペースだった。試写会、見学会、記者研修、海外取材団などをあわせたクラブ主催会合・行事の総回数は220回で、累計1万5642人が参加した。11年度の党首が集まった衆院選党首討論会、自民党総裁選、民主党代

表選の候補者討論会などは高い関心を集めた。大統領、首相ら外国人ゲストの記者会見は51回だった。減収だが支出削減で黒字

経常収益は3億9639万円(千円以下切り捨て)となり前年度比355万円減った。会費は会員数の減少が続いたため減収となった。事業収益は貸室、飲食売上割戻金なども減った。

一方、経常費用は3億9004万円(千円以下切り捨て)となり前年度比2337万円の減少と

なった。経常収益との差額である当期経常増減額は635万円増だった。費用の43%を占める借室関連費(プレスセンタービル9階全部と10階ホール)は、9階借室料が引き下げられたため227万円の減少となった。事務局の職員構成が変わり人件費は1197万円減少した。事業運営費、会報発行・ホームページ運営費も節約に努力した。

12年度単年度の収支差額は984万円の黒字となり、次期繰越金は計3849万円となった。

(専務理事・事務局長 中井良則)

貸借対照表 2013年3月31日現在

(単位:円)

科目	2012年度	2011年度	増減
I 資産の部			
1. 流動資産			
現金預金	23,360,992	13,311,558	10,049,434
仮払金	127,812	327,801	-199,989
立替金	6,062,034	8,781,963	-2,719,929
未収会費	7,137,300	6,209,500	927,800
未収貸室料	1,406,551	1,886,142	-479,591
前払金	11,667,354	11,691,646	-24,292
流動資産合計	49,762,043	42,208,610	7,553,433
2. 固定資産			
(1) 特定資産			
退職準備積立預金	228,062,948	228,062,948	0
特別修繕積立預金	164,973,032	164,973,032	0
特別記念事業積立預金	55,000,000	55,000,000	0
クラブ賞積立預金	204,907,246	204,907,246	0
経営安定化資金積立預金	229,179,392	259,179,392	-30,000,000
特別システム更新積立預金	30,000,000	0	30,000,000
特定資産合計	912,122,618	912,122,618	0
(2) その他固定資産			
内装設備	8,142,421	9,261,736	-1,119,315
什器備品	3,541,391	5,334,763	-1,793,372
敷金	32,271,109	32,271,109	0
保証金	55,342,000	55,342,000	0
その他固定資産合計	99,296,921	102,209,608	-2,912,687
固定資産合計	1,011,419,539	1,014,332,226	-2,912,687
資産合計	1,061,181,582	1,056,540,836	4,640,746
II 負債の部			
1. 流動負債			
仮受金	1,086,800	1,882,900	-796,100
預り金	400,000	0	400,000
未払金	9,779,302	11,097,561	-1,318,259
流動負債合計	11,266,102	12,980,461	-1,714,359
2. 固定負債			
退職準備引当金	228,062,948	228,062,948	0
固定負債合計	228,062,948	228,062,948	0
負債合計	239,329,050	241,043,409	-1,714,359
III 正味財産の部			
1. 指定正味財産			
指定正味財産合計	40,822,328	40,822,328	0
2. 一般正味財産			
一般正味財産合計	781,030,204	774,675,099	6,355,105
正味財産合計	821,852,532	815,497,427	6,355,105
負債及び正味財産合計	1,061,181,582	1,056,540,836	4,640,746

【注記】特定資産の増減について
2012年度予算の補正(第81回総会決定)にしたがい、経営安定化資金積立預金から特別システム更新積立預金へ3000万円を積み替えた。

日本記者クラブ 決算書（正味財産増減計算書）

2012年4月1日から2013年3月31日まで

(単位：円)

科 目	公益目的事業会計					収益事業等会計			法人会計	合計
	公益1 記者会見等	公益2 クラブ費	公益3 会報・HP	共通	小計	収益1	共通	小計		
1 一般正味財産増減の部										
1. 経常増減の部										
(1) 経常収益										
受 取 会 費				257,663,796	257,663,796				72,674,404	330,338,200
プレス会員会費収入				216,472,464	216,472,464				61,056,336	277,528,800
賛助会員会費収入				41,191,332	41,191,332				11,618,068	52,809,400
事 業 収 益						63,351,420		63,351,420		63,351,420
貸室料収入						38,869,022		38,869,022		38,869,022
飲食売上割戻し						17,693,098		17,693,098		17,693,098
施設機器賃借料						6,789,300		6,789,300		6,789,300
雑 収 益		382,444		1,068,603	1,451,047		330,872	330,872	149,287	1,931,206
受 取 利 息		382,444		1,068,603	1,451,047		212,146	212,146	149,287	1,812,480
その他の雑収入							118,726	118,726		118,726
受 取 入 会 金				604,500	604,500				170,500	775,000
経 常 収 益 計		382,444		259,336,899	259,719,343	63,351,420	330,872	63,682,292	72,994,191	396,395,826
(2) 経常費用										
事 業 費	144,274,417	6,311,092	64,987,198	57,118,850	272,691,557	48,451,516		48,451,516		321,143,073
借 室 料	39,152,837			24,176,877	63,329,714	19,870,065		19,870,065		83,199,779
共 益 費	6,655,978			4,110,066	10,766,044	3,377,909		3,377,909		14,143,953
空調・光熱費	3,447,868			2,129,059	5,576,927	1,749,793		1,749,793		7,326,720
ホール専用利用費	25,000,000			25,000,000	50,000,000					50,000,000
役 員 報 酬	6,838,400	1,367,680	5,470,720		13,676,800					13,676,800
給 料 金	27,086,772	1,593,340	22,306,753		50,986,865	14,340,056		14,340,056		65,326,921
賞与・諸手当	13,973,042	821,944	11,507,211		26,302,197	7,397,493		7,397,493		33,699,690
福利厚生費	311,622	26,710	240,394		578,726	178,070		178,070		756,796
会 議 費	2,164,463	83,249	527,241		2,774,953					2,774,953
事業運営費	17,612,547	677,406	4,290,236		22,580,189					22,580,189
会報発行・HP運営費			19,222,692		19,222,692					19,222,692
クラブ賞実施費		1,393,451			1,393,451					1,393,451
運 営 雑 費	364,407	14,016	88,766		467,189					467,189
通 信 費	1,242,805	248,561	994,244		2,485,610					2,485,610
印 刷 費	359,100	71,820	287,280		718,200					718,200
交 通 費	64,576	12,915	51,661		129,152					129,152
減価償却費				1,702,848	1,702,848	1,538,130		1,538,130		3,240,978
管 理 費									68,897,648	68,897,648
借 室 料									14,682,313	14,682,313
共 益 費									2,495,991	2,495,991
空調・光熱費									1,292,951	1,292,951
役 員 報 酬									3,419,200	3,419,200
給 料 手 当									14,340,055	14,340,055
賞与・諸手当									7,397,492	7,397,492
福利厚生費									133,553	133,553
クラブ管理費									17,776,791	17,776,791
機器備品費									333,250	333,250
消 耗 品 費									1,983,668	1,983,668
事務委託費									3,285,874	3,285,874
事務雑費									676,115	676,115
通 信 費									621,403	621,403
印 刷 費									179,550	179,550
交 通 費									32,288	32,288
減価償却費									247,154	247,154
経 常 費 用 計	144,274,417	6,311,092	64,987,198	57,118,850	272,691,557	48,451,516		48,451,516	68,897,648	390,040,721
当期経常増減額	△ 144,274,417	△ 5,928,648	△ 64,987,198	202,218,049	△ 12,972,214	14,899,904	330,872	15,230,776	4,096,543	6,355,105
2. 経常外増減の部										
当期経常外増減額	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
当期一般正味財産増減額	△ 144,274,417	△ 5,928,648	△ 64,987,198	202,218,049	△ 12,972,214	14,899,904	330,872	15,230,776	4,096,543	6,355,105

たまには、立ち止まって考えてみませんか。現役の記者に呼びかけて、日本記者クラブの勉強会が6月に始まる。名は「記者ゼミ」。

最近の記者はとにかく忙しい。ニュースはめまぐるしく動き、デジタルが背後から追い立ててくる。日本記者クラブにはあまり縁がなく、出たことがあるのは字になりそうな記者会見だけ。そんな加盟社の記者にもっとクラブを活用してもらえないか。理事会や企画委員会から声が上がリ、浮かんだのが「記者ゼミ」のアイデアだった。

対象はおおむね40歳前後の記者。月に2回、20〜30人で日本記者クラブ会議室のテーブルを囲む。講師の話を1時間聞いて30分質疑という組み立てはふだんの記者会見と同じだが、記者ゼミは時の人やテーマから一歩引いて、ニュースの背景に光を当てる。最初のテーマには「アジアの国々はいま」を取り上げ、外務省アジア大洋州局長にスタートの総論を頼んだ。共産党体制を維持しながら経済大国になった中国、民主国家であるインド、インドネシア、経済発展と民主化が注目されるミャンマー、とアジアはさまざまな国がまじり

現役向け「記者ゼミ」今月から まずアジア・中国テーマに

合う。尖閣や拉致といった目の前の問題から少し離れて、中国の台頭を軸にアジア情勢と日本外交の基本を話してもらおう。

中国編に入る第2回は「中国夢とは何か」。中国共産党が「中華民族の復興」を掲げるにいたったのはなぜか。川島真・東大大学院准教授がアヘン戦争以降の近現代史から解き明かす。7月の「複雑さを増す都市・農村の格差」「庶民から見た中国社会」と続き、秋からは軍事や経済を取り上げる。

中国編のあとは朝鮮半島、米国ヘシリーズを移す予定だ。軌道に乗れば、単発のテーマでのゼミも開きたいと思っている。

ゼミナールと聞くと学生時代の苦みが込み上げそうだが、記者ゼミは現場をよく知る講師に実例と鋭い視点にあふれた話をしてもらおう。「ゼミ生」はクラブ加盟社のメール連絡網を通じて募集している。

各社に出した案内では「ジャーナリズム力の増強支援をめざす企画」とうたった。ゼミの講義は、すぐに記事にはならなくても、きつと取材・報道のパワーアップにつながるだろう。

特別企画委員 吉田 克二

特別企画委員 始動

記者会見は企画委員のアイデアと協力で、これまでにない回数を重ね、質を高めている。さらに、会見を活性化し現役記者の参加も進めたい。そこで、長い記者経験を生かしたプロジェクトを練ってもらおうと、OB記者に「特別企画委員」をお願いすることになった。4月から個人D会員の吉田克二さん(朝日新聞出身)を迎え、早速、具体化したのが「記者ゼミ」。開講が楽しみだ。(中井良則)

会議報告

●第430回企画委員会

(5・9 宴会場)

6月から開講する「記者ゼミ」について吉田特別企画委員が説明した後、今後のゲスト候補などを協議した。昨年に続き刊行する冊子はテーマ別とすることとし、8月下旬の記者研修会までに完成させることを確認した。第16回記者研修会は8月28、29の2日間で開催される。

出席 小孫委員長、星、小此木、坂東、橋本、山岡、脇、実、宮田、檉山、別府、杉田、川上、田崎、神志名、杉尾、小栗、和田、川村、萬、泉、露木、村田、吉田の各委員。

●第343回報委員会

(5・13 シルバールーム)

5月号について意見交換した後、6月号の編集を協議した。出席 会田委員長、中村、高橋、守田、小西、佐塚、大寺、石川、牧の各委員。

●第205回施設運営委員会

(5・15 小会議室)

新委員長の西野智彦TBSテレビ報道局長(旧・星野誠氏)があいさつした後、3、4月のアラスカ売り上げと貸室利用状況について事務局が報告した。

8月12日から17日の間、9階の空調設備更新工事のため、クラブを臨時休業することを決定し、この期間を除いた8月中の貸室料を例年通り半額とすることを確認した。

出席 西野委員長、貞森、佐藤、田代、國府、西野(文)、八牧の各委員。

●第429回会員資格委員会

(5・16 小会議室)

6月1日付の会員入退会を審議し、理事会に答申した。出席 小田委員長、中島、船木、荒木、播磨、玉置、山本、川嶋、青木の各委員。



佐々

涼子

フリーライター

5・8(水)著者と語る「エンジェルフライイト 国際霊柩送還士」/ 司会・山崎登委員/出席・36人

佐々さんは「20歳代の後半、結婚後に仕事をしたいと思いつち、日本語の教師をしていたとき、日本で暮らしながら片言の日本語しか話せない人々と接していて、日本人とほちが病気をしたり、事故にあつて亡くなつたらどうなるのだろうと感づいたのがきっかけでした」と話し始めた。国境を越えて遺体や遺骨を故国に送り届ける「国際霊柩送還」という仕事を通して、海外の死をテーマに



現場の取材重ね 感じた「死を想え」

することは15年越しだという。その後ライタースクールに通つて機会を探したが、死をテーマにしたノンフィクションは売れないと、多くの出版社の人に言われたそうだ。それでもほとんど知られていない海外で亡くなった人のその後は書くべきテーマで、多くの人に知ってほしいという気持ちは変わらなかった。

転機となつたのは2011年3月11日の東日本大震災の発生で、多くの人が死を身近なものとして考えるようになったからではないかと感じた。死の現場の取材は、亡くなつた人や遺族のプライバシーの問題と向き合わなければならず、何が正しいのかわからないままに手探りでやってきたが、大切なことは誠実さや熱意をわかつてもらうことだと思つて語つた。

死の現場を取材してわかつたことは、家族の死をきちんと受け止めるためには、きちんと別れることが重要だということ。また人は生きてきたように、亡くなるのではないかという感想を持つた。

高齢化社会では、多くの人が医療機関ではなく家庭で亡くなるようになるとして、次作では「在宅医療」をテーマに取材を進めていると言ふ。重いテーマが続くが、死を見つめることは「現代人の生きかた」を考えることにつながるとして、ゲスト恒例の揮ごうは「死を想え」と記された。

企画委員 NHK解説主幹 山崎 登

ダビッド・チョケワンカ・セス・ペデス

5・8(水)記者会見/司会・中井良則専務理事/通訳・丸山啓子/出席・37人/動画

南米の反米勢力の中でボリビアのモラレス政権はユニークだ。欧米の世界観に抗し、先住民の権利や環境の大切さを唱える。2009年に国名をボリビア多民族国と改名した。同年、国連に提案し、ボリビアで地球を「母なる大地」と呼ぶのにちなんで、4月22日のアースデーを「国際母なる地球の日」に変えさせた。

政権が発足した2006年からモラレス大統領の右腕として活躍するのがこの人だ。先住民アイマラ民族の出身で、記者会見には普段着のカーディガン姿で登場した。

「ボリビアは歴史的な変革の途上であり、資本主義や社会主義を乗り越えるモデルを構築しようとしている。西欧の開発モデルは不平等と危機を生んだ。我々自身の宇宙観を取り戻し、人間は大いなる自然の一つだと自覚すべきだ。我々は人間の生活を重視し『VIVIR BIEN B I E N (良く生きる)』を掲げる」

表情を変えないまま、先住民の用語を交えつつ、学者のように語る。「母なる大地がもたらすミルクが水だ。母なる大地の上で、我々はみな兄弟だ。対話によって知り合い、学



我々の生き方は「VIVIR BIEN」

すべきだ」と述べ、「米国と補完と均衡の関係を保ちたいが、介入があれば排除する」と断言した。5月初め、内政をかく乱したとして米援助機関を国外追放したばかりだ。

大学の卒論テーマは先住民の権利だ。1970年代の軍事独裁時代は民主化運動、さらに農民運動、先住民組織の活動家だった。議員経験もないまま、いきなり同国初の先住民出身の外相に就任した。その印象は政治家というより哲学者に近い。

朝日新聞元中南米特派員 伊藤 千尋



新旧メディアのハイブリッド化で「黄金時代」を

アリアナ・ハフイントン
ザ・ハフイントン・ポスト創設者 プレジデント兼編集長

5・8(水)記者会見/司会…
瀬川至朗委員/通訳・西村好美・
宇尾真理子/出席…78人/動画

世界で24億人が利用するインターネットは、社会や経済の隅々にまで入り込み「破壊と創造」を続けている。メディア分野も例外ではない。

4月にサービス開始10周年となったアップルの音楽配信「アイチューンズ・ストア」は典型例だ。CD収録曲のばら売りが一般化し、音楽の新しい聴き方が広がった半面、CDは売れなくなりレコード会社の収益力は低下した。店じまいする販売会社もあった。ネット化の波をかぶった産業に生じる構造変化を物語る。

アイチューンズ誕生から2年後、2005年に米国で始まったニュース・ブログサイト「ザ・ハフイントン・ポスト(ハフポスト)」が朝日新聞社と組み日本に進出した。創設者のアリアナ・ハフイントン・プレジデント兼編集長は「伝統的なメディアと新しいメディアによるハイブリッド型で、ジャーナリズムは黄金時代を

迎えるのではないかと語ったが、警告も忘れなかった。「デジタル版に適應しないと生き残れない」

ここで「デジタル版」が、単に紙媒体のニュースを電子媒体に載せ替えるといった無邪気な策を

意味しないのは言うまでもない。ネットの普及で人びとのメディア消費のありようは一変した。例えば記者がネタを集めて発信したニュースは読者の手によってソーシャルメディア上の「ネタ」となり、ときに容赦ない評価とともに瞬く間にデジタル回覧される。

ハフポストの特徴をハフイントン氏は「読者中心モデル」と語り、一方的なニュース供給ではなく、読者も参加する基盤とした。「プレゼンテーション型からパティシペーション型への移行」が起きているという。

コンテンツ自体のクオリティーが高いことはもちろん、テクノロジを駆使して便利さや楽しさまで備えた「しくみ」を編み出さなければ、知的な刺激の伴うメディア体験を求める読者の心に響かない。「黄金時代」を引き寄せるには相当の発想の転換がいるだろう。

日本経済新聞編集委員 村山 恵一

ばんざい 萬歳 ちまら 章

J A 全中(全国農業協同組合中央会)会長

5・10(金)昼食会/司会…村田泰夫委員/出席…75人/動画

「農は国の基」。信念だというこの言葉を何度も口にしました。人の命の源を作る農業者は、国民に安全、安心な農産物を安定的に提供する役目がある。食は地域や文化をも支える。その強い自負が、約900万の組合員のトップとして組織を引っ張る原動力になっている。

しかし、いま、農業・農家は強い逆風の中にある。日本の農業は高い関税や補助金などで守られてきた。関税ゼロを基本線とする環太平洋経済連携協定(TPP)交渉参加に、政府がカジを切ったからだ。

政府の試算によれば、関税撤廃に



「農は国の基」と TPP 反対貫く

なれば農林水産物の生産高は3兆円減少する。コメの32%、サトウキビなどは実に100%が輸入品に取って代わる。「農業者の職業が失われてしまう。(政府に)交渉力があると言われても、まったく実感できないのが正直な気持ち」と吐露した。

とはいえ、昨年暮れの衆院選で支持した自民党が政権を取ったあげくの交渉参加だ。「今でもTPP反対は変わらない。参院選でも反対の候補者を推薦する」と言い、同党や衆参両院の委員会がコメなど重要農産5品目の関税除外を求める決議をしたのを指摘。「決議に即した判断をお願いする。政治は信頼。最後には国会の批准もある」と強調した。

また、今後の農政について、農業者の所得増大、食料自給率の向上との二大目標を説明した。日本型直接支払制度の確立を求めた。質疑では、かみ合わない答弁もあった。新潟県のコメ農家の出身。

自然を相手につらい作業をこなす農家には口下手な人が多い。何で分かってくれないのか、硬い表情にそんないら立ちもあるのだろうかと感じた。

恒例の揮ごうは、冒頭の言葉の脇に「前進」と添えた。意味を問われ「まさにTPP反対の前進であります」。このときは、貴重な満面の笑みを見せた。

新潟日報東京支社報道部長

大塚清一郎

おみ しげる
尾身 茂
新型インフルエンザ等対策有識者会議会長

5・13(月)研究会「鳥イン
フルエンザ」/司会:宮田一
雄委員/出席:56人/動画



鳥インフルエンザ 事態終息 まだ早い

中国で感染が広がったH7N9型の鳥インフルエンザウイルス。研究会が行われた時点(5月13日)では、感染者の報告数は減少傾向にあった。しかし、尾身会長は「感染が終息すると考えるのは時期尚早」と警鐘を鳴らした。

他の鳥インフルエンザウイルスは夏に感染者が減少し、冬に増加する。今回のウイルスも同様の可能性がある。今回のウイルスも同様の可能性がある。また、感染源・経路が解明されていないことも指摘した。中国当局は、「市場の生きた鳥が感染源」との見方を示している。中国CDC(疾病センター)が4月17日までの感染者を分析したところ、調査してきた人の77%が鳥などと接触しており、遺伝子分析の結果、患者のウイルスと鳥から採取したウイルスが似ていることが分かっているためだ。また、市場の鳥を殺処分した後に、患者が減少傾向を示していることもある。

しかし、尾身会長は「鳥からヒトへ感染する間に、他の動物などを挟んでいる可能性がある」とみる。鳥と接触していない感染者もいるほか、ウイルスの遺伝子の塩基配列には直接感染したとは考えられない相違点があるからだ。「対策のために感染源と経路の特定が重要」と話す。

研究会ではパンデミック(大流行)が起きた場合の被害についても言及した。2009年にパンデミックを引き起こしたH1N1型は多くの人々が基礎免疫を持っていたと思われる。一方、今回のH7N9型はヒトが免疫を持っていないため、「被害が大きくなる可能性がある」とした。

パンデミックが起きた時には、初期対応の重要性を強調。09年の際は、対応が過剰との非難も上がった。しかし、最初に感染の広がりが見つかった関西地方では原因ウイルスを駆逐することに成功した。また、国内の死亡率は10万人あたり0・2人と世界で突出して低かった。「新しい感染が起きた時、公衆衛生的な対策が重要になる」と主張した。

毎日新聞科学環境部 藤野 基文

Shinji Matsumoto
申珉秀
駐日韓国大使

5・15(水)昼食会/司会:山岡邦彦委員/通訳:ビヨン・ソッキョン/出席:114人/動画

離任会見を静かに語り始めた申珉秀大使は、両国関係の「現住所」を「不透明な北東アジア情勢のなかで、日韓関係は選択ではなく必須の時代」と位置付けた。

日本での2年余の勤務期間、日韓関係は「未来志向」とはほど遠かった。ソウルの日本大使館前に慰安婦少女像が建立され、慰安婦問題をめぐって日韓首脳会談は激論となった。李明博前大統領は竹島に上陸し、日本



21世紀の 「新しい日韓関係」 への視線を

2000年初頭からの「民間交流と多文化の時代」とパラダイム(規範)の変化でくくつてみせた。それは両国が乗り切ってきた激動の時代である。「過去」に足をとられて両国の溝が深いといっても、戦後日韓史の振幅ほどではないのだ。外交最前線に立ってきた大使は歴史を語ることで「21世紀の新しい日韓関係」への視線を日本に促したかったのだろう。

は国際司法裁判所提訴を視野に入れた。双方の政権が交代したが、閣僚の靖国参拝問題などで新政権の日韓外交はいま、凍結状態といっている。そんななかでの昼食会で申大使は、日韓の60余年を、国交正常化までの「対立と葛藤の時代」、ソウル五輪(88年)までの「冷戦下、政府主導の時代」、

歴史問題については、朴槿恵政権の対日観をにじませて「日本はこの地域の平和と繁栄を守るリーダーになるべきだ。過去史の解決はアジアの国々と友好関係を強固にしていく出発点であり、日本の平和と繁栄を担保する道である」とスピーチをしめくくった。日本勤務の最後に選んだ仕事は、東日本大震災の被災地と東京電力福島第一原子力発電所を訪問することだった。2年前、着任して真っ先に訪れたのも震災直後の岩手、宮城、福島3県だった。韓国メディアにその心境を「日本人に『日本のそばには韓国がある』と伝えたかった」としたその言葉が印象的だ。

産経新聞外信部編集委員

久保田るり子

堀江 正彦

地球環境問題担当大使

5・16(木)記者会見 / 司会：泉宏委員 / 出席：42人 / 動画



「同じ船」に乗る 新らしい 枠組みが必要

地球温暖化による危機が叫ばれる中、地球規模での対応を探る気候変動枠組条約をめぐる国際交渉は遅々として進まない。1997年12月に京都で開催された第3回締約国会議(COP3)で温暖化の原因とされる温室効果ガス(二酸化炭素削減を義務づけた京都議定書が採択され、2005年に発効した。しかし、米国の離脱などで各国の温室効果ガス削減は思ったより進まず、先進国と開発途上国の利害対立などがその後の交渉の進展を阻んできた。

日本政府は09年秋の政権交代で誕生した鳩山内閣が温室効果ガスの削減目標として、前提条件付きながら「25%」という大胆な数字を国際公約として打ち出したが、11年3月11日の東日本大震災による福島原発事故などでこの公約は実現困難となり、安倍内閣はゼロベースでの見直しを進めている。

こうした現状について、気候変動国際交渉の前線指揮官である堀江氏は「先進国と開発途上国の双方が同じ船に乗れるような新らしい枠組みが必要」と力説。京都議定書の意義は高く評価しながらも、先進国と開発途上国の削減への義務、責任が大きく異なることから「参加するすべての国が削減義務を負う枠組みにしないと、本当の国際協力には結びつかない」と指摘した。

堀江氏は鳩山元首相が公約した「25%削減」についても、「それだけにフォークスが集中しているが、世界全体でみると日本の排出量は09年時点でわずか3・8%。それよりも、世界で一番先に公害を克服した国としての経験と技術を世界に提供することが大切」と強調。ポスト京都議定書となる「新らしい枠組み」を「これまでのトップダウンからボトムアップにして、互いに努力を評価する交渉にレジームチェンジすることを目指し、次のターニングポイントとなる15年のCOP21(フランス)での合意に向け、国際交渉の最前線で戦い抜く決意を示した。

前企画委員 時事通信出身 泉 宏

ペーター・マウラー 赤十字国際委員会(ICRC)総裁

5・17(金)記者会見 / 司会：杉田弘毅委員 / 通訳：池田薫 / 出席：24人 / 動画



複雑な構図で 紛争当事者が 見えにくい

世界各地の紛争地で、人道支援を続けるのが赤十字国際委員会(ICRC)だ。アンリ・デュナンがイタリヤ統一戦争中の1859年、悲惨な戦場を見て決意し、1863年に創立した組織で、今年で150年を迎える。紛争当事者のどちらにもくみしない「高度な中立性」が組織の柱。戦争捕虜の保護を追求し培った経験が、1996年にペルーで起きた日本大使公邸占拠事件でも生かされたことは記憶に新しい。

上目遣いで、時折笑みを見せる。穏やかな口調で語るマウラーICRC総裁が「死に直面している人がどれくらいいるか。人数だけで言えばシリアは必ずしも世界最悪ではない」と少し力を込めた。

シリアを上回る多くの住民が今こ

の瞬間も命の危険を感じながら暮らしている国として総裁が挙げたのは、ソマリアとコンゴ(旧ザイール)。さらにサハラ砂漠の南に広がる「サヘル地域」も加えた。

こうしたアフリカの紛争は、アサド派と反アサド派が正面から衝突するシリアと比べると当事者が非常に見えにくい。

コンゴについてマウラー総裁は①北キブ州の反政府勢力「M23(3月23日運動)②カタンガ州の民兵組織「マイマイ」の2集団が絡む紛争を、大きな枠組みとして例示した。しかし、これに「さまざまなグループが各陣営に支援を提供している」ことが問題で、複雑に絡み合う紛争の構図が事態を見えにくくしている。

しかも最近「中央アフリカ共和国から武装勢力がコンゴに侵入してきている。これが事態をさらに複雑にしている」と一層やこしい。

ICRCの現場では地域ごとに当事者を特定しなければ、そもそも「中立」そのものが築けない。難しい時代を迎えているが、それでも活動は今この瞬間も続いている。

時事通信外信部 松尾 圭介



伊藤 誠
第5回アフリカ開発会議(TICAD V)担当大使

5・20(月)記者会見
司会・杉尾秀哉委員
出席・63人/動画



「人間の安全保障」に基づく支援を

場を示した。

今なぜアフリカか？ 率直な疑問に伊藤大使は市場としての魅力を挙げた。豊富な資源をもとにアフリカ、とくにサブサハラは10年間で平均5・8%の目覚ましい経済成長を遂げ、日本企業の関心も高まっている。そうした中で5年に1度開催されるアフリカ開発会議(TICAD)は、インフラ整備や人材育成などの官民連携を柱の一つに掲げ、民間企業のアフリカ進出を全面的に後押しする姿勢を鮮明に打ち出している。その背景には影響力を増す中国に比べ日本の出遅れ感がある。

冷戦終結後、世界各国のアフリカへの関心が急速に薄れた中で、日本はアフリカに手を差し伸べ、20年にわたってTICADを開催してきた。中国や韓国、インドなどのような国益重視のバイの会議ではなく、国際機関やNGOにも開かれたマルチの枠組みである。また、日本は中国とは違って国際的なルールを守りながら支援を行ってきた。大使はこうした点を強調し、より質の高い成長を実現するために技術移転や人づくりを優先し、「人間の安全保障」に基づいた日本らしい支援を続けていく立

20年におよぶ会議や地道な支援がアフリカの成長に貢献したことは間違いないが、それにもかかわらずアフリカでの日本の存在感が低下し、日本企業の進出も進まなかったのはなぜだろうか。会見では「アフリカ票はどれだけ得られたのか」「アラブの春によりインクルーシブな開発へのアプローチはどう変わったのか」大使が考え込むような質問も相次いだ。アフリカでの外交の難しさはアフリカを経験し、安保理担当も務める大使自身もつとも理解していることだろう。成長の一方で資源への過度の依存や格差の拡大など課題も少なくない。「アフリカの世紀」が本場に訪れるのか、これからが正念場である。同時に日本にとってもアフリカ外交の転機に差し掛かっていることを会見であらためて感じた。

NHK解説主幹 二村 伸

横倉 義武
日本医師会会長

5・24(金)昼食会/司会・露木茂委員/出席・72人/動画



地域医療の再興図る

日本医師会の会長就任直後の2012年5月以来、2度目の会見となった。スピーチのテーマは「地域医療の再興に向けて」。会長選以前から地域医療を再興しなければならぬとの思いが強かったという。

「今までの医療政策は『地域ごとに異なる医療提供体制をどのように再構築し充実させるか』というポトムアップの視点が欠けていた。日医はインターネット上での政策に反映させていく。ゴリ押しではなく、エビデンスに基づき政策提言する旨を宣言した。

地域医療の再興にあたっては、「かかりつけ医を中心とした医療連携の促進が重要」とし、そのためには日医も、かかりつけ医機能を磨くための生涯研修の場を設けて自助努力することを約束した。

医療連携を進める場合、今や医療機関同士だけではなく、介護や在宅

医療、保険薬局などの関連領域ともつながる必要がある。この点に関して、横倉氏は「ITを活用してネットワーク化を図り、包括的な連携体制を構築していくことが有効」だとした。

同日は参院本会議で、マイナンバー法が成立した日でもあった。ただ、医療分野での利用は先送り。医療が外れたのも、日医が適用に反対したことが大きい。そのため出席者からは、連携推進にITを活用すべきとの主張ならば、なぜマイナンバー法に反対したのかをただす質問があった。

「われわれは個人情報が決して流出しないようにしてほしいと訴えていた。情報漏えいを防ぐ手立てがしっかりと打ち出されるのであれば、マイナンバーになるかは分らないが、番号管理・利用に反対はしない」

前向きな回答だったことに安堵した。「参院選を前に、日医は政治との距離を縮めているのではないか」との質問には、「政治と遠い位置にはいられない。その時々々の政権与党と接触する」と横倉氏。恒例の揮ごうには「和して同ぜず」としたためであり、簡単にくみしない姿を期待したい。

日経B P社 日経ヘルスケア編集委員 庄子 育子

平野 克己
ジェトロ・アジア経済研究所

地域研究センター

上席主任調査研究員

5・24(金)記者会見 / 司会・小此木潔委員 / 出席・42人 / 動画



「資源の呪いを覆せるか」

3年前、初めてアフリカを訪れた。ちょうど南アフリカでサッカーのワールドカップ大会が開かれているとき。乗り継いだヨハネスブルグの空港にはブゼラの音が響き渡っていた。経済成長はやや鈍化した時期とはいえ、空港の熱気から「元気なアフリカ」が伝わってきた。目的地は、さらに飛行機で約2時間半かかる内陸の小国マラウイ。ある企業の食糧支援を取材するためだった。

世界の最貧国とされるマラウイの農村部では栄養失調の子どもが少なくない。主食はトウモロコシ。その自給自足生活は天候に左右される。食習慣とはいえ、動物性タンパク質摂取のために食するネズミを道路脇で売っているのには驚かされた。HIV感染者が多く、若くして死亡する人は後を絶たないという。

実際に、ある村に食糧を届けたりもした。高成長を続けていても、生

活の国内格差また国間格差は大きく、経済成長の恩恵を受けているのはまだ一部のように感じた。初めての経験は衝撃の連続だった。

平野さんの話で印象深かったのは、「アフリカの成長はアフリカ自身がつくったものではない」との指摘である。先進国や中国を中心にした新興国の燃料、鉱物など「資源爆食」がアフリカをクロージズアップさせる、いわば他国頼みの経済というわけだ。人々を元気づかせているのは流入するマネーによる個人消費だとか。

消費に浮かれるなかで、生活を底上げする学校を含めたインフラ整備が置き去りにされかねない気がしてならない。マラウイだけでなく、アフリカの多くの国が世界の貧しい国の上位を占める。資源依存がかえって開発を後退させるという「資源の呪い」を覆せるか。「21世紀の課題」と平野さんは強調した。

資源の呪縛が解けたときこそ、アフリカが自力で成長できる日なのだろう。マラウイの風景を思い浮かべながら強く思った。

毎日新聞夕刊編集部編集委員

内野 雅一

Duan Yehuang
段躍中

日中交流研究所所長・日本僑報社社長

5・27(月)シリーズ企画「中国とどうつきあうか」② / 司会・坂東賢治委員 / 出席・62人 / 動画



日中関係すこし肩の力を抜いて

中国を扱うシリーズ企画の2回目は、前回の自衛隊OB香田洋二氏による安全保障問題からガラリと変わって、日本在住22年という中国人、日中関係の書籍を出版する日本僑報社の段躍中さんが語る草の根交流談義だ。

「中国と日本の信頼関係は完全に崩壊した」「私の教える大学で中国語の履修者が減っている」。冒頭の言葉こそ深刻だったものの、ほぼ一貫して楽観的に語った。

段さんは2005年から中国で日

本語作文コンクールを主催、毎年2、3千人の若者から応募を得ている。「日本ファンをつくりたい」との一念による、地道な活動である。

段さんは「日本の良さ、ごく普通の日本情報を中国に発信していきたい」とも話した。例に挙げたのは、上海より安い首都圏の不動産物件だっ

たり、新緑の高尾山だったりする。それが、ソーシャルメディアで反響を呼ぶのだという。

日中関係の報道に携わる各社の記者は、昨年から緊張しっぱなしの情勢に目を凝らし、次の局面はどうなるのかと考えあぐねている。そんな時に段さんの話を聞いても、拍子抜け感があるかもしれない。前回に比べ出席者が少ないのはそれを見越していたことだっただろうか。

しかし、日中関係の修復、改善を目指す場合、段さんを越える効果的な取り組みが果たしてあるのか、とも思う。

質疑で段さんは最近の日本国内でのヘイトスピーチについて問われ、「多くの人々は歴史を含めてしっかりと認識を持っている」と応じた。また、「中国には日本との戦争を主張する軍人もいるが、日本と戦っても負けるというのが多くの国民の意見だ」とのことだ。

すこし肩の力を抜いて。でも、粘り強く考えていこう。そんなふうにご段さんのメッセージを受け止めた。

朝日新聞論説委員 村上太輝夫



三浦 しをん 作家

5・30(木)総会記念講演/司会：吉田慎一理事長・橋本五郎委員/出席：125人/会見詳録

権威のある日本記者クラブの総会記念講演で、これまでと全く毛色の違う、史上最年少の講師をお迎えするにあたって最も考えたのは、「普段着のおもしろさ」を引き出したいということだった。しをん作品の何とも言えぬ「ふくよかなおかしみ」、斜めに構えているかのようでずばり本質を見る目みtainなものが浮かび上がったらいなと思つた。



しをんの花園を散策する

著書『秘密の花園』をもじって「しをんの花園を散策する」とした。最も気にしたのは、聴いた方々が退屈せず、少しでも「おもしろかった」と言ってくれることだった。

方、自分の小説への反応をブログで確かめるプラスマイナス、編集者との関係などを聞いてみた。

懇親会になって何人かの方に感想を聞いた。聞き手にそう聞かれては「おもしろくなかつた」と言うわけなと思いつつ、「おもしろかつた」と言われると、とてもうれしい気がした。ブログで「しかもブスだよ」と書かれ、「顔面で書くわけじゃねえんだよ。パソコンで書くんだよ」と心で怒つた話を確かめた時は「思わず凍りついたよ」という友人もいた。しかし、しをんさんは「だつて事実だもんね」と実にさらりと答えていた。このあたりが「しをんファン」の多いゆえんなのだろう。

個人的に一番おもしろかつたのは政治家論だった。石破茂自民党幹事長の家族のみなさんが家庭でどんなふうにかを心配(？)され、加藤紘一氏の「加藤の乱」の子どもつぼさの指摘など実に冴えていた。いつか政治家を組上には決して私ひとりではないだろう。

企画委員 読売新聞特別編集委員

橋本 五郎

モンセフ・マルブズキ チュニジア大統領

5・31(金)記者会見/司会：脇祐三委員/通訳：臼井久代/出席：49人/動画



サハラ以南支援へ 三角協力進めたい

フランスに留学して医師となり、本国で弾圧にめげず人権運動を進めた闘士だ。世俗主義・リベラル勢力のまとめ役として「ジャスミン革命」に参加し、欧米での評価も高い。

「アラブの春」について、「人民が起こした革命で、リーダーもイデオロギーもないのが特徴」と説いた。目下の大きな課題は、①新たな政治体制の構築、②経済の苦境の克服、③治安の確保——の3つだという。

草案づくりが進む新憲法では「独裁が復活しないよう、首相と大統領が権力を分かち合う」政治体制を考えていると説明した。権力分散構想は、イスラム勢力と世俗主義勢力の対立を和らげる知恵かもしれない。政治変動の背景になった若者の雇

用問題を短期間で解決するのは不可能だ。大統領は「将来への展望と希望を示すことが重要だ」と強調し、それがハッキリしていれば、若者は物事を冷静に考えてチャンスを待つことができると語つた。

政治家はちゃんと新憲法づくりを進めているのか。経済はちゃんと回り始めているのか。汚職はなくなっているのか……。移行期には、プロセスの現状が国民から見える透明性が不可欠という説明も印象に残る。

今回の来日は、第5回アフリカ開発会議(TICAD5)に出席するためだ。

日本のアフリカ支援については、「チュニスの近郊に日本の協力で開設したテクノパークが、知識と技術の移転のほか、人としてどうあるべきかの倫理も含めた人材育成の場になる」と指摘した。そのうえで、日本とチュニジアがともに参加し、サハラ以南の国々を支援する「三角協力を、ぜひ進めたい」と語つた。

エモーションよりも理性を感じさせる記者会見だった。

企画委員 日本経済新聞コラムニスト

脇 祐三

ピーター・ピオット ロンドン大学衛生・熱帯医学大学院学長
アレックス・コウティノー マケレレ大学感染症研究所長

5・31(金)記者会見／
司会・宮田一雄委員／
通訳・佐藤雅子／出席・
18人／動画

日本政府が創設した野口英世アフリカ賞の授賞式は5年に1度、アフリカ開発会議の開催にあわせて行われる。会見はその第2回授賞式の前日だった。

アフリカのエイズ対策に大きく貢献した2人はエイズの流行がいまも続いていることを指摘し、治療の普及とともに、エイズの原因となるHIV(ヒト免疫不全ウイルス)に感染している人、感染の高いリスクにさらされている人への差別や偏見の解消に取り組むことの重要性を改めて強調した。

ピオット博士(右)はベルギー出身の医学者で、国連合同エイズ計画(UNAIDS)初代事務局長として1995年から14年間にわたり世界のエイズ対策を主導してきた。また、76年にザイル(現コンゴ民主共和国)でエボラ出血熱の流行が発生した際、真っ先に現地調査にあたった医師としても有名だ。



エイズ対策 最前線で貢献したい

コウティノー博士は30年にわたりHIV診療に携わるとともに、2001年から7年間、ウガンダのエイズ患者支援組織TASOの事務局長として、HIV陽性者に対する偏見や差別の解消にも積極的に取り組んできた。コウティノー博士夫妻の兄弟姉妹だけでも10人がエイズで亡くなっ

ているという。

会見では、九州沖縄サミットにおける日本の提案が2年後の世界エイズ・結核・マラリア対策基金(世界基金)創設につながったことなど、保健分野の日本の貢献を評価。野口英世博士については「弱い立場の人たちに研究を捧げたグローバルサイエンティストの一人(ピオット博士)」、「野口博士の10分の1でも業績が残れば自分も大きな貢献が果たせたと思うだろう(コウティノー博士)」と語った。

企画委員 産経新聞特別記者

宮田 一雄

Gallery 9th floor OPEN

クラブラウンジで写真展

毎日新聞写真部で約30年間カメラマンを務めた荒牧万佐行(あらまき・まさゆき)さんの作品を展示した「46人の仕事現場」荒牧万佐行写真展」を、6月28日(金)までラウンジで開催している。毎日新聞紙上に1996年から98年まで連載された『仕事の現場』に掲載した約90人のうち、荒



牧さんが選んだ46人を紹介する。『仕事の現場』はもともと学芸部の企画で、荒牧さんと記者の二人三脚で回を重ねてきた。撮影は平日、ときには1日かけて、相手に密着して行ったという。

荒牧さんは「意識したのは、ポートレートではなく仕事場という『現場』を写真に収めること。作家や舞踏家、女優などの人たちが働く場の雰囲気や空気を読者に伝えたかった。それを見てもらえるとうれしい」と話している。

写真は市川崑さん(映画監督)

* * *

9階ラウンジの一角に展示スペースを設けました。名付けて「Gallery 9th Floor」。報道写真などクラブにふさわしいギャラリー展を企画します。

会員アンケート 貴重な声

今年3月、会員のみなさんに記者会見、会報、施設利用についてアンケートをお願いし、貴重な意見を寄せていただいた。ただ、回答は60歳代、70歳代を中心に57人とどまり、2400人を超える会員の見方を反映しているわけではない。

それでも、会見のテーマを尋ねると「中国の深層」から「メディアはこれでよいのか」に至るまで約50件が集まった。会報は9割の方が「読む」と答え、「ネット事情」「マスメディア批判」などの紙面企画提案もあった。今後も会員の声を生かしクラブをさらに充実させたい。ご意見を事務局にお寄せください。

被災地通信⑬ 宮城県

「犠牲と教訓」テーマに
いのちと地域を守る

武田 真一（河北新報編集局次長）

災地を巡った際、複数の被災者から同じ言葉が返ってきた。400世帯を超す石巻市の仮設住宅団地では、自治会長の男性がこう言った。

「問題や課題はさまざまあるが、支援のおかげもあり何とか乗り切ろうとしている。それよりも家族や仲間が大勢亡くなったことを無にしないほしい。備えてほしい」

防災報道への反省生かし
「狭く深く」の活動へ

東日本大震災では行方不明者を含め1万9千人近い人が命を落とした。科学が発達し、インフラ整備も進んだ現代社会にあつて、1度の自然災害でこれだけの犠牲が出た事実を思い返すと、慄然とする。

それは、事前の備えによつて犠牲を減らすことはできなかったのか、もっと多くの人を救えたのではないかと、2度と犠牲を出さないために」という教訓に集約していく。事態がある程度落ち着き、あの日をじっと顧みる時間ができると、問い直しは深くなる。日常が慰霊とともにある被災地では、「犠牲と教訓」は最も大切なテーマであり続ける。

河北新報は今年元日の一面トップに防災の誓いを据えた。震災を受け



愛知県田原市で1月に開いた「むすび塾」(河北新報社提供)

て昨年4月に新設した「防災・減災のページ」を全面展開のキャンペーンに引き上げた。タイトルは「いのちと地域を守る」。われわれ自身の誓いであり、地域全体の誓いにしてほしいという願いを込めてある。

震災以前に力を入れていた「広く浅く」啓発する防災報道が、避難に十分に役立たなかったという強い反省がある。一歩踏み込んで、町内会や学校など小単位の集まりに専門家とともに取材班が出向き、その場に必要なる防災を探り合う「狭く深く」働きかける取り組みを始めた。

「むすび塾」と名付けたこの定例ワー

クショップは、宮城を中心これまでに14回開いた。番外として南海トラフ地震に備える高知県や愛知県、海外ではインドネシア・アチェでも開いた。宮城の震災被災者が語り部として参加し、「命を守るため、とにかく真つ先に高台へ逃げてほしい」とじかに訴えている。

「わがこと」として忘れない

「むすび塾」と並行して家族単位の個別避難訓練を仕掛けているほか、紙面では犠牲の現場と防災対策の盲点を再検証し、わが身の問題として被災を掘り下げる内容の連載「わがこと」を展開している。

よく言われる「震災を忘れない」という覚悟を、まずは自らのためとらえ直してほしい。被災地のためと限定してとらえると、復旧・復興も含めて震災は遠く離れた不幸な地域の災厄「ひとごと」とどまり、風化は進む。犠牲者の無念も、被災者の苦悩も、次なる災害で少しでも犠牲を減らすため、復旧・復興をスムーズに進めるための教訓として生かされて初めて報われる。

被災地・被災者の深い願いを、われわれは長く伝え続けていく。

ただ・しんいち▼1981年入社
2012年4月から現職

発生から2年が過ぎたこの時点で、被災者があらためて強く願うこと、訴えたいことは何だろう。

「住まいのめどを早く立てて」「安定した仕事を手にしたい」「医療や教育を立て直し地域の未来を語れるようにしてほしい」。メディアが詳報する通り、暮らし再生と地域復興を訴える声が真つ先に挙げられるが、それだけではない。被災者の願いはもう一段深い。

「悲劇を繰り返さないで。同じような犠牲者を1人でも少なくしてほしい」。5月中旬に宮城県沿岸の被災地を巡った際、複数の被災者から同じ言葉が返ってきた。400世帯を超す石巻市の仮設住宅団地では、自治会長の男性がこう言った。

安倍首相「育休3年」に思う

飯田裕美子(共同通信社)

リアリティ欠いた絵空事 メディアは当事者の声を

強い違和感、としか言いようがな

かった。ようやく子育て支援の必要性に政治の目が向き、社会保障の一角に位置し始めたというのに、なぜ…。4月19日、「育児休業3年」を高らかにうたう安倍晋三首相の日本記者クラブでの成長戦略スピーチを聞きながら、時計の針が全速力で逆回りするような、めまいに似た崩壊感をく

らくらと味わった。

ママたちの反発

「3年間は、お子さんを抱っこし放題抱っこしてもらい、3年後からは、ちゃんと会社に戻れるような、そういう支援をしつかりしていく」
始まりは前日のテレビ番組だった。

翌19日、安倍首相は経済三団体に、就職活動の後ろ倒しや育休3年推進を要請。その直後の、日本記者クラブでのスピーチである。

「抱っこ」という言葉は、愛情あふれる優しいお母さんを想起させる。特に「今の子育てはなっていない」と考える高齢者には、受けのいいフレーズだろう。現に共同通信社内でも「幼い時にお母さんが手を掛けて育てるのはいいことでは」という声が上がった。しかし、首相スピーチへの反応を取材すると、当の子育て世代は、流石の言葉で言うなら「コレジャナイ感」でいっぱいだった。



生中継もされた日本記者クラブの会見での安倍首相(4月19日)

3年も休んだら席がなくなる。正社員でないと育休なんて無理。夫は絶対に取らないから結局私だけ。企業は女性を採用しなくなる。保育園に入らず3年も家にいたら煮詰まる。2人目産んだらどうなるの…。

自分の感じた違和感が、多くの人と一致していると確信した。3年休んでまたちゃんと職場に戻れるなら、育休を取りたい人には良い制度かもしれないが、現実はそうではない。子育てがあつて思う存分働けず、評価を気にしながらも必死で職場にしがみついているママたちには、育休3年は理想論であり絵空事としか映らなかったのだ。

少子化は無言の抵抗

日本の子育て施策は1998年に、厚労白書が「3歳までは母親が育てるべきだ」という、いわゆる3歳児神話を「根拠がない」と否定したところから大きく転換する。子育てが孤立化している現実に向き合い、専業主婦こそ負担感が大きいことに着目。虐待防止の観点からも、保育所の一時利用や地域の「子育てひろば」事業などを拡充してきた。

職場では短時間勤務や在宅勤務を使いやすくする方がよっぽど現実的であり、育児・介護休業法もそうし

た観点から改正が重ねられた。育休3年をうたう成長戦略が、こうした経緯をなし崩しにするのであれば、強い危機感を持たねばならない。だが、経済三団体への要請内容を検証してみると、実は「短時間勤務も含めた職場環境の整備」だったと分かり、やや気を取り直した。それでも、情緒的な言葉を用いて政策の全体像を伝えなかったスピーチへの不信感は拭えない。

各紙が批判を展開したこともあって、安倍首相は最近「短時間勤務の推進」にも言及する変化を見せている。社内でも、子どものいる女性記者たちが当事者の切実な声を出稿し続けたことで、かなり理解が進んだと思う。メディアに多様な人材がいることの重要性を強く感じた。

子どもをもつことは、人生への肯定であり、この国で子どもをもつことは、この国への肯定であるはずだ。とは、この国への肯定であるはずだ。子育て施策をこれ以上当事者の実感抜きに進めるなら、少子化という無言の抵抗は、ますます続いてしまう。そうならないためにも、私たちは子育て世代のリアリティを書き続けなければならぬと思う。

いいだ・ゆみこ▼1984年入社 社会部デスク 盛岡支局長などを経て 12年5月から生活報道部編集委員・論説委員

ボストンマラソン・テロ事件

近野 宏明(日本テレビ)

SNSで拡散した情報 正確性、客観性に危うさが

初めての海外勤務で着任してから半月。「駆け出し特派員」の私はこの事件を通じて、アメリカのメディアと社会の特性を複数の断面から見ることになった。

一つの断面は「誤報」だ。我々が現場入りした事件当日(4月15日)の夜には、「事件に関わったとみられる人物を病院で拘束」との報道が駆け巡った。しかしその事実はなく、誤報は混乱の中で曖昧にされていった。

米の誤報はNNN本記で触れず

続いては17日。CNNが「容疑者を拘束」と速報を打った。アメリカ中のテレビの前には人だかりができていただろう。そして、テレビの前で憤りを抱えるだけでは収まらなかった市民の一部は、「容疑者が移送される」と伝えられた裁判所前に集まってきた。異様な興奮の渦が誤報を通じて形成されることになった。

取材態勢上、我々海外メディアは現地報道から一定の引用が不可欠だ。しかし我々は様々な理由からこの報道は慎重に扱うとし、本記では触れなかった。結果として、この判断は正しかった。

誤報したメディアは複数あったが、トップを切った大々的に報じたCNNには批判が相次いだ。ただ、その日の番組では明確な謝罪と訂正には至らず、リポートした記者は、後日地元ラジオ番組などで釈明することになった。

たゆまぬ切磋琢磨でジャーナリズムの範だったはずのアメリカのメディアだが、事実を正確に伝えるという基本にも、危うさを抱えることが明らかになった。

もう一つの断面は「拡散の主体」だ。報道機関の失態と軌を一にしたと言わなければならない。警察はツイッターを使い、自ら情報の拡散までも行った。最近アメリカの公共セクターは公式ツイッ

ターやフェイスブックの活用を進めている。その結果、逮捕発表とほぼ同時に、日本のメディアも容疑者逮捕の速報を打ち、アメリカの一部メディアより早く事件の節目を報じることになった。

しかし課題の一つは正確性の担保である。言うまでもなく「なりすまし」「ハッキング」などの危険が付きまとう。悪意の第三者が警察署内の会議室を使って偽の記者会見を行う可能性はまずないだろうが、同じ感覚でインターネット上の情報を扱うと、計り知れない大失敗することになる。

高揚するテロとの戦い 後退する銃規制

そして今回、最後に容疑者を追い詰めたのは市民の通報だった。容疑者の映像が公開され、大統領が情報提供を呼びかける中で逮捕。テレビやネットなどを通じて容疑者の姿が国民に刷り込まれた上での終結だった。

テロリストとは徹底的に戦うアメリカ。前述のボストン警察の発表文が「正義は勝った」という文言であったことが象徴的だ。テレビやインターネットを媒介に、アメリカが一つになって容疑者を追い詰めたという高揚感が伝わってきた。その一方で、ボストンでの「テロと



街を封鎖し、容疑者の捜索活動を続ける警察(日本テレビ撮影の映像から/同社提供)

の戦い」が続くさなかの4月17日、オバマ政権肝いりの銃規制法案は連邦議会で否決された。ボストンテロ事件の犠牲者3人を追悼したアメリカでは、銃による死者は年間1万人を数えている。驚くほ

かない。銃販売時の身元調査の拡大すら導入できずに、きょうも多くの人が銃で死に至っているのだ。しかしもはや、アメリカのメディアでも銃規制の第一ラウンドはヤマを越えたことになっている。むしろ国を挙げての規制強化に向けた熱い一体感を感じられない。「テロとの戦い」とは対照的だ。

ボストンテロ事件の1週間、私はアメリカなるものの特性を強く印象づけられることになった。

こんの・ひろあき▼1995年入社 縄担当 『NEWSリアルタイム』メインキャスター 政治部などを経て 4月からワシントン特派員

富士山世界遺産へ 「世界基準」と「生業」 どう調和させるか

樋川 義樹
(山梨日日新聞報道部)



山開きに合わせ、富士山の頂上を目指す登山者
(2012年6月30日/吉田口登山道・富士山7合目付近/山梨日日新聞社提供)

4月30日午後11時20分ごろ、山梨県世界遺産推進課前で廊下に待機する報道各社の記者やカメラマンをかき分け、執務室から職員が飛び出していった。職員は丸めたA4判の紙を握っていた。

「富士山については、三保松原を除き『登録』が適当との勧告がなされた」記者クラブの資料ボックスに、国連教育科学文化機関(ユネスコ)の諮問機関による評価結果速報の発表資料が投げ込まれたのは、同11時半ごろ。諮問機関からは事前に三保松原の除外などを要請され、「登録の可否は五分五分」という見方もあっただけに、資料を手にした記者たちは一様に胸をなで下ろした。

翌日、記者会見した横内正明知事

は「天にも昇るような喜びでいっぱいだ」と言い、目尻を下げた。

約20年前、自然遺産を目指して始まった富士山の世界遺産登録の動き。ごみ問題などを理由にした挫折を

経て文化遺産として登録され、地元は沸き返った。富士吉田市の道の駅では翌日に「当確」を祝う垂れ幕を掲示。直後の大型連休後半、富士山の麓の地域は、昨年同期より3割ほど多い約50万人の観光客でにぎわい、地元の観光関係者の多くが正式登録の前から、「世界遺産効果」を感じ始めている。

■登山者数増加に入山料徴収案も
いいことづくめのようにも思われる富士山の世界文化遺産登録。だが、6月下旬にユネスコ世界遺産委員会です正式に登録されると、地元は山積する「宿題」と向き合い、世界が納得する答えを出さねばならない。

早急に対応が必要なのは、富士山

への来訪者の増加だ。特に山梨側の吉田口登山道は昨年7、8月のわずか2カ月で27万人が頂上を目指した。富士山の4つの登山道では最も多く、週末になると頂上付近は御来光を拝もうという登山客で渋滞。夜明けが近づくと、業を煮やしてつづら折りの登山道脇の急斜面を登る人さえいる。山小屋関係者からは「既に飽和状態。落石などの事故につながりかねない」と、対策を求める声も上がる。

今夏、登山者はさらに増加する見通しだ。地元では登山道につながる有料道路の夜間通行止め、混雑時の登山道の一時封鎖などの案が浮上。だが、法規制上の問題があり、実現の可能性は見通せていない。急場の対応として登山道の誘導員を2人増員するが、来訪者の命を守る観点から、十分とは言えない。

■「文化遺産の保全」の視点忘れずに
富士山の登山者を対象にした入山料は山梨、静岡両県知事が来夏の導入を目指すことで一致したが、目先の今夏の試行について、山梨は慎重、静岡は前向きと、足並みは乱れた。7月1日の山開きを目前にした今、徴収する金額や徴収方法も、定まらないままとなっている。

諮問機関の勧告ではボートや水上

バイクなどのレジャースポットとして知られる富士五湖について、「利用の規制が弱い」と指摘。ホテルや観光施設などの建設が進む山梨県側の麓は、名指しで開発の抑制を求められた。文化遺産としての富士山を保全するために、「世界基準」の対応が要請されたといえる。

富士山観光は、地元にとって日々の生活の糧を得る「生業」となっている。一方、世界文化遺産としての登録は、富士山の文化的な価値を保全し、後世に伝えることを世界に約束することにほかならない。この両方を調和させるといふ難しい宿題に地元がどう取り組んでいくのか、地元紙の視線で見つめ続けていきたい。

ひかわ・よしき▼2004年入社 社会部などを経て、12年から報道部(原政) 富士山世界文化遺産登録の取材を担当

一口メモ

世界文化遺産として政府が推薦した「富士山」は、富士五湖や富士講信者が宿泊した「御師住宅」、三保松原など25件の構成資産からなる。国連教育科学文化機関(ユネスコ)の諮問機関は富士山について、富士講などの山岳信仰の舞台となった「信仰の対象」、浮世絵などのモチーフとなった「芸術の源泉」としての価値を認め、三保松原の除外を条件に、登録を勧告した。

朝から降っていた雨は午後になつて上がった。夜7時に始まった祭事



ご神体を白い布の絹垣で囲み、本殿へと進む神職の行列
(5月10日/出雲大社/山陰中央新報社提供)

出雲大社 平成の大遷宮

60年ぶりの祭事 地域振興に どう生かす

山本 洋輔
(山陰中央新報出雲総局)

の終盤、ご神体を囲んだ行列が、目的地的の本殿敷地内に入ったのを見届けたら、ぽつぽつと雨が頬をぬらし始めた。まるで、神様の移動中は雨雲が押しつけられていたかのよう……。縁結びの神様として知られる出雲大社(島根県出雲市大社町)で5月10日にあった「本殿遷座祭」。神がかり的な現象も伴いながら、「平成の大遷宮」の最も重要な儀式は滞りなく営まれ、祭神・大国主命のご神体が、修繕を終えた本殿に無事に戻った。

平成の大遷宮は、国宝の本殿の修繕を中心とする8年間にわたる大事業。社殿の修繕によって「神様の御霊力がよみがえりを果たされる重要なおとめ」(千家尊祐宮司)である。本殿遷座祭は前回、昭和の遷宮からちょうど60年ぶりに執り行われた。

■ 創建からの思い 現代に受け継がれる

2008年4月、ご神体を本殿から仮殿に移す仮殿遷座祭が行われ、大遷宮が本格的に動きだした。空き家となった本殿を工事用の巨大な素屋根で覆い、その中で大屋根の檜皮のふき替えなどが行われた。

本紙では、本殿修繕の過程を連載「出雲大社「大遷宮を支える匠たち」(09年10月〜13年5月、計20回)で紹介

介。「二世二代の仕事」として、持てる技のすべてを注ぐ職人たちの姿に迫った。

大屋根のふき替えを担ったある職人は、屋根の解体時に、長さ4尺(約120センチ)という、他の寺社では見ることがない巨大な檜皮を確認し、要不要の次元を超越した先人の思いを感じ取った。「このお社は特別なものであるとの創建からの思い。それがずっと受け継がれてきたのではないかと」。その道一筋の匠の洞察力に感銘を受けた。伝統建築の継承にも遷宮の意義はあるのだ。

13年3月に本殿と周りの摂社の修繕が完了。真新しい檜皮の大屋根と、黒く塗り直された棟飾りが、優美で重厚な本殿の姿を一層際立たせた。

装いも新たになった本殿に、5年ぶりに主を迎える本殿遷座祭を、境内で見守ったのは1万2千人。「戦後の復興期に重なつた昭和の遷宮同様、日本に大きな力を授けてくれると信じる」。2度目の遷宮体験となった地元80代男性は、そう思いを込めた。

■ 記者として二世一代の「縁」

遷宮を機に、表参道の「神門通り」もよみがえった。08年発足のまちづくり組織「神門通り甕りの会」を中心とする取り組みにより、通りの店舗

数は40増えて60店舗に。空き店舗が目立っていた通りは、个性的な店が多数並び、歩いてみたくなる通りに生まれ変わった。

本殿遷座祭が終わった今、伝統芸能やコンサート等の奉祝行事が1カ月間毎日催されるなど、にぎわいが続く出雲大社周辺。遷宮を観光など地域振興にどう生かしていくか。ポスト遷宮はこれからのテーマだ。

60年ぶりの祭事の取材は、「記者冥利に尽きる」と言えるが、実は当方、本殿遷座祭を間近に控えたこの春、出雲に赴任し、担当に。正直、戸惑いも大きかった。とはいえ、次の遷宮は生きて立ち会えないだろうと思ふと、この貴重な「縁」があたがたい。

やまもと・ようすけ▼1990年入社
生活文化部などを経て 3月から出雲
総局報道部長

一口メモ

出雲大社の「平成の大遷宮」は、1744(延享元)年に造営された現在の本殿や諸社殿の改修事業。本殿は檜皮をふき替え、棟飾りは伝統的な塗装「ちゃん塗り」を130年ぶりに復活させた。本殿遷座祭後も関連行事が2015年度まで続く。総事業費80億円。現本殿の遷宮は1809(文化6)年、1881(明治14)年、1953(昭和28)年と、60〜70年に1度の周期で行われている。

労働記者30年

労組地盤沈下のワケを読む

山路 憲夫



やまじ・のりお

1946年生まれ 70年毎日新聞入社 84年から東京本社社会部労働担当 91年編集委員 論説委員(社会保障・労働担当) 2003年から白梅学園子ども学部教授(社会保障、社会福祉) 著書に『労働組合は死んだか』(1986年 こう書房)『医療保険がつぶれる』(2000年 法研)など

労働運動の存在感が薄れた。労働組合が登場する記事はめっきり減った。昨年の衆院選で民主党が惨敗した一因として、同党最大のスポンサーである連合系労働組合の力の低下も明らかにあるだろう。

日本の労働運動はなぜここまで地盤沈下したのだろうか。この30年、労働組合を見てきた筆者には思い当たることはいくつかある。

書いた記事でうらまれたことはあまたあったが、逆に凶らずも労組から感謝された話から始めたい。

◆「借金全通」追及記事に感謝？

1984年、社会部労働担当となつて1年足らずの頃、郵便局の局員らを組織していた全通(全通信労働組合、当時の組合員は18万人)内で、全

国各地にあった全通会館をめぐる不祥事で密かに「調査委員会」が作られたのを知った。取材を重ねると、次のような事実がわかった。

かつて全通は当局の差別的な人事政策に反対して、年賀状配達をボイコットする大闘争を展開、「権利の全通」ともいわれ、国労(国鉄労働組合)や動労(国鉄動力車労働組合)とともに、総評(日本労働組合総評議会)を支えた三公社五現業の公労協の中心労組だった。当時は緊張した労使関係もあって、70年代から「組合活動の拠点づくり」「組合員の福利厚生」を目的に全通会館を次々と各地に建設した。

ところが、組合員だけでなく一般向けの会館に次第に変質、豪華なホテル並みの会館を作ったり、ピンク

サービスを売り物にする温泉地の会館まで現れた。組合役員の天下り先の確保と巨額な建設費のバックマージンという、うまみもあると言われた。北海道ニセコ町に80億円もの資金をつぎ込んだ会館は空港からのアクセスも悪く、利用客ももくろみを大きく下回った。会館の経営を担った労組幹部たちは、経営の素人で、採算を度外視した経営に陥り、総額400億円もの借金を抱えるに至った。

その全容を85年11月27日毎日新聞社会面トップで「あきれた全通商法」「採算度外視、組合幹部が独走」との見出しで報じた。同じく全通幹部OBと郵政省との相乗りで運営する郵政互助会で、中心となった全通出身の幹部による乱脈経営を明るみにした記事も続報した。

関係した幹部が辞任、全通会館の売却も決定された。当然ながら筆者は全通から「目の敵」にされた。

ところが、である。労働担当から一時期離れ、再び編集委員に戻った頃、「全通会館問題」当時の委員長をしていたM氏に久しぶりに出会った。うらみつらみを言われると思いきや、いきなり握手を求められた。聞くと、新聞報道後全通会館を徐々に売却を始めたところ、バブルの最中を迎え、横浜の全通会館などビークの高値で売却、一挙に借金を返済できたと言った。「あなたが記事にしてくれたおかげです」と言うのだ。なんと面はゆい思いをした。

◆幹部たちの腐敗と迷走

振り返ると、日本の労働運動にとつ

て80年代は、大きな節目の時期でもあった。

筆者が労働担当になった頃、労働組合とりわけ総評は「昔陸軍、いま総評」と言われたかつての面影はなかった。中曽根臨調(臨時行政調査会)で、公営企業体の民営化が次々と打ち出され、総評の中心を担っていた国労、動労、全通、全電通(全国電気通信労働組合)など官公労系の労組は後退を重ねていた。

ところが、スト資金の積立金などの資金は潤沢で、金の使い方は派手だった。東京・八重洲口の国労会館にあった国労本部を訪れると、昼食でも銀座の料亭に出かけていた。国鉄の分割・民営化に直面しながら、幹部は無力だった。腐敗した幹部も少なからずいた。総評解散前の象徴的な出来事の一つが「全通会館問題」だった。

民営化が総評の解散につながったのは紛れもないが、幹部たちの腐敗、迷走の責任も免れない。

しかし、総評や同盟(全日本労働総同盟)に代わって89年11月、「平和幸せ 道開く」を掲げて華々しく結成された民間労組中心のナショナルセンター・連合(日本労働組合総連合会)は勤め人の期待に応えられたのだろうか。答えは明らかに否である。

右肩上がりの経済が終わりを告げ、労組の主要な役割だった賃上げの比重は低下した。代わって働く人々に共通する年金や医療保険などの社会保障、税制改革、労働時間短縮など政策制度課題の重要性が増した。増え続ける非正規社員も含めた組織化(労組の加入率)を進めることが、連合に課せられた役割だった。

ところが、社会保障制度改革について連合は言い分をほとんど通すことができなかった。組織化も一向に進められなかった。

85年に労働者派遣法ができて以来、規制が次々と緩和され、製造業の自由化まで認めてしまった。パートや派遣など非正規社員が増え続け、非正規の雇用者は4割近くに及ぶ。結果として働く人々の格差の広がりを許した労組の責任は免れない。

その原因は二つある。一つは日本特有の企業別労働組合という組織形態が時代に対応できなくなったこと、もう一つはリーダーシップの欠如である。

◆組織化には人も金もいる

2001年4月26日付毎日新聞の社説の「視点」欄に、当時の鷺尾悦也連合会長(故人)を名指しで「労組改革できぬ鷺尾会長は辞めよ」と署名

入りで書いた。労組の反発は強かったが、あまりにもリーダーたちの動きは鈍すぎた。

そのせいかどうか、鷺尾会長はその年の会長選挙への立候補を断念したが、代わって登場したリーダーたちも凡庸だった。

03年11月、笹森清・会長(故人、肩書は当時)と高木剛・ゼンセン同盟会長(のちに連合五代目会長)との間で会長選挙が行われた。その最中「日本労働ペンクラブ」が日本記者クラブで二人の候補を呼び「候補者から聞く」会を催した。

その場で私は「組織化についての連合の動きをみてみると、竹槍精神を鼓吹して事態を乗り切ろうとした、かつての大日本帝国参謀本部を思い出す。金も人も出さずに組織化できるわけがないではないか」と第二次大戦中の軍部まで持ち出して批判した。毎日の大先輩の故・新名丈夫氏が第二次大戦中、「竹槍では間に合わぬ」と軍部を批判して、戦地に追いやられた「竹槍事件」である。

そんな古い史実まで持ち出したのは、組織化には人も金もいると言いたかったからだ。年間7000億円を超える労働組合費の9割が企業別組合に集中、自動車総連や電機連合といった産業別組織には1割、ナシヨ

ナルセンター・連合の予算は労働組合費全体の1%。企業内での労働条件の引き上げや組織化は難しい。産業別組織やナショナルセンターに金も人もシフトしないと、組織化も政策制度の前進も難しい。それがわかっているのに、加盟組織からの反発を恐れ、リーダーは手をこまぬいていただけ。

◆求む、使命感あるリーダー

そのシンポジウムから、もう10年が過ぎた。鷺尾氏も笹森氏も故人となった。労組はますます企業内のタコソポに入り込むばかりである。

「会社人間から社会人間に」。敬愛する連合初代事務局長の山田精吾さん(故人)は早くからそう言い続けた。会社という堀の中の労働組合運動から脱しないと労組も日本の未来もない。それをよくわかっていた。

正規も非正規も、老いも若きも、男も女も差別なくワークシェアで働ける社会を実現させる。それが、人類がかつて経験したことがない、この未曾有の少子高齢社会を乗り切る突破口ではないか。

使命感を持つリーダーよ、出でよ。

私が会った
あの人思想の巨人のたくまざるユーモア
吉本隆明さん

細田 正和

ことしの正月、記者仲間たちとの新年会で、古い友人が小さなため息をついた。「おれたち、ヨシモトのいない年を迎えたんだな」

何を今さら。そんなの当たり前の話で、吉本さんは昨年3月に亡くなったのだし、そろそろ一周忌だぞ…と言いつ返そうとした私だが、口をついて出たのは「そうだよな。吉本さんのいない時代になったんだな」という相づちだった。

詩人で思想家の吉本隆明さんと初めてお会いしたのは、1990年初夏だった。当時吉本さんは60代半ば、新たな代表作となる『ハイ・イメージ論』執筆のただ中だった。「愛知県警担当から文化部に来た変わり種です」と先輩が紹介してくれたが、過激な論争家（しかも連戦連勝！）という先入観にとらわれていた私は、取りえのずうずうしさも失って、客間の畳に額

をこすりつけていた。吉本さんは手からお茶をくんですすめてくれたが、味は覚えていない。

後日、和子夫人や長女多子（さわか、漫画家ハルノ宵子）さんから、「あの時の緊張ぶりは、笑えたよ」と何度もからかわれることになった。

私の一方的な恐怖は、素顔の吉本さんを描いた多くのレポートが指摘するとおり、先入観による誤解であった。おごらず、高ぶらず、市井の大衆として生きる…生活人としての吉本さんは、そんな倫理を生き抜いた。暮らしに四季折々の句読点を欠かさぬ吉本家に出入りするうち、取材よりむしろ、お花見、飲み会、海水浴、映画見物、忘年会などのお付き合いに熱心になっていった。出入りの書生の気分だった。

暮らしの場での吉本さんはまことに気さくだった。武骨で控え目なふるまいが、たくまざるユーモアとなっ



世間話で盛り上がる吉本隆明さん（左）と筆者（東京・本駒込の吉本家の食堂で、2008年9月／筆者提供）

て周囲を和ませた。家族や友人たちのどんちゃん騒ぎを、ビールをなめながらニコニコ見ていた。昼時には台所に立つて「地獄うどん」をふるまってくれた。

そんな吉本さんの最晩年の姿は、近刊『開店休業』（プレジデント社）で読める。食をめぐる短いエッセーに、ご長女が追想文とイラストを付した。父と娘の幸せな関係が、読む者も幸せにする。

だがしかし、「思想家吉本」はまったく別だった。どれほど尊敬する先輩だろうと（例えば埴谷雄高氏）、売

れっ子の若手学者だろうと（例えばニューアカ）、いったん筆を執ったら容赦なかった。徹底的に対峙した。時には罵倒した。オウム真理教をめぐる宗教論では、自ら社会の指弾に苦しんだ。いつだって「僕が倒れたらひとつの直接性が倒れる／もたれあうことをきらった反抗が倒れる」とうたった初期の詩篇そのものの姿勢だった。

1952年の『固有時との対話』から半世紀以上、何ものにも寄りかからぬ単独の思考で走り続けた吉本さん。照れた下町口調で「よせやい」と言うにきまっているから、「戦後思想界の巨人」という大げさな看板は使わない。

だが確かに、そう呼びたくなるほど、業績は多岐にわたって屹立している。国家論、言語論、文芸批評、イメージ論、宗教論…先日、あらためての全集刊行といううれしい知らせが届いた。

寂しがつてばかりいられない。残された言葉を頼りに「吉本のいない時代」を、私たちは生きていかなければならないのだ。

ほそだ・まさかず▼共同通信デジタル推進局長 元文化部長

MY BOOK

MY PR



■昭和平成、駆け歩き〜記者の回想

青野賢太郎（NHK出身）

特派員時代の思い出を中心に、私青野賢太郎、85歳。病を得て回復し、気力のあるうちに書き始めたのがこの回想記です。NHK記者、海外特派員時代のことを中心に、手元の資料も見ず、ただ思い出すままに書き連ねました。回想が回想を呼び、忘却しかけていた過去の情景が蘇るといふ体験もしました。過去の亡霊たちを一つの枠にはめこみ終えて、ほんとしていきます。



自費出版

■鉞子 世界を魅了した「武士の娘」の生涯

内田義雄（NHK出身）

知られざる生涯とその時代 杉本鉞子（えんこ）の『武士の娘』は最初から英語で書かれ、ニューヨークで出版されると、「人生の書」として高く評価されベストセラーになった。1925（大正14）年のことである。その後フランス、イギリス、ドイツなど7カ国で翻訳・出版されている。越後長岡藩の元家老の娘に生ま

れ結婚のためアメリカへ渡った一女性の半生記に過ぎない本が、海外でなぜ評価され多くの読者を得たのだろうか。その謎を解き明かしたいと思いい取材の旅に出た。なお日本語版が出たのは1943（昭和18）年、日米戦争の真つ最中であつた。



講談社 1680円

■環境金融論 持続可能な社会と経済のためのアプローチ

藤井良広（日本経済新聞出身）

環境金融の決定版 本書は筆者が新聞社から大学に転じて以来のテーマの「環境金融」を体系的にまとめたものである。縁遠い存在と思われてきた環境と金融の連携の重要性と必然性を論じている。基本は、環境コストを企業の財務諸表に計上し内部化を促す点にあるが、その手段として、環境格付け、資産除去債務、環境クレジット、気候変動債などの多様な工夫を紹介、原発リスクの評価も盛り込んだ。業界思考の視点に立った、入門書にして決定版と自負している。



青土社 2520円

追悼

TOKYO発50年 「戦後の日本」ともに追った親友サム

サム・ジェームソンの突然の訃報は、私には大きな衝撃でした。

彼の死は、日本記者クラブにも、日本外国特派員協会（外人記者クラブ）にも、そして私個人にとつても大きな損失です。

サムは私より6カ月年下でしたが、外人記者クラブには私より6年早い1963年、日本記者クラブには3年早い76年に入会した先輩記者でした。ロサンゼルス・タイムズ東京支



サム・ジェームソンさん 37歳の歴史家。1941年4月19日、出血性脳梗塞のため死去。享年76歳。特派員としての活動は、戦後から現在まで続いた。

友人になりました。

取材の場だけではなく、また、両プレスクラブ以外の場所、例えば彼の大好きだった焼き鳥屋で、よくビールを飲みながら歓談しました。

日本記者クラブで一番印象に残っていることといえば、2001年3月、アメリカの歴史学者、ハーバート・P・ビックスが、当時、天皇と戦争のかかわりを書いて話題になった著書『昭和天皇（邦題）』が刊行されたのを機に記者会見が行われたときのことです。たまたま私はこの会見の司会をしていたのですが、2時間の予定だった会見が4時間に延びたのは、サムが熱心に多くの質問をしたせいかもしれません。

最後にサムを見かけたのは外人記者クラブの昼食会。同じテーブルの少し離れた席に座っている、普段と変わらない彼にあいさつをしました。まさか、その後に入院し、そのまま逝ってしまうとは……。病院に見舞わなかったことも含め、本当に心残りだと思っています。

ゲブハルト・ヒールシャー（元南ドイツ新聞極東特派員 元企画委員）

関係を築く努力をしました。この改革を通して、私たちは親しい

情報発信

クラブ施設では会員による各種の会合が行われています。企業や大使館などの賛助会員も記者発表の場としてクラブを利用してあります。

■ソマリア支援の国連機関が会見

ソマリアで支援活動する国連児童基金、国連食糧農業機関、国連世界食糧計画の国連3機関の現地事務所代表が来日し合同で会見した。昨年の新政権発足後、国内情勢は改善したが、子どもたちの栄養不良率は依然として最悪レベルを脱していないとして一層の支援強化を訴えた。(5.2 10階ホール)

■「日韓未来対話」フォーラム開催

日本の「言論NPO」と韓国のシンクタンク「東アジア研究院」が民間レベルを主体とした議論の場「日韓未来対話」を立ち上げた。1回目の対話には日本側から小倉和夫元駐韓大使、川口順子元外相、ジャーナリストなど、韓国側から李泰植元駐米大使、孫洙延世大学国際学大学院院長、金姫廷セヌリ党国会議員など計約20人が参加して将来の日韓関係について意見を交わした。(5.11 10階ホール)

■「科学ジャーナリスト賞2013」贈呈式

日本科学技術ジャーナリスト会議が優れた科学報道に贈る「科学ジャーナリスト賞」の贈呈式が行われた。大賞は朝日新聞の連載「原発とメディア」で取材班代表の上丸洋一、隈元信一の両編集委員が表彰された。このほかの受賞者は、再生医療検証報道をした八田浩輔毎日新聞記者、NHKスペシャル『世界初撮影! 深海の超巨大イカ』を制作したNHKエンタープライズの岩崎弘倫エグゼクティブプロデューサー、NNNドキュメント『活断層と原発、そして廃炉』を制作した日本テレビの加藤就一チーフディレクター。(5.14 10階ホール)

■むのたけじ講演会

首都圏秋田懇話会10周年記念の集いで、98歳のむのたけじさんが「希望は絶望のど真ん中に 人類と個人・世界と地域-秋田・東北・ジャーナリズムを語る」と題して講演した。首都圏に住む秋田県出身者など約100人が出席した。(5.15 宴会場)

■安倍晋太郎氏を偲び安倍晋三総理と語る会

安倍晋太郎元外相が亡くなって22年。当時の番記者や関係者などが集まり、毎年、命日にクラブで偲ぶ会を開催している。今年は安倍首相と昭恵夫人も出席して行われた。約80人が参加。(5.15 宴会場)

■日本ジャーナリスト懇話会総会・講演

自民党の河野太郎衆院議員が「原発対応と日本のエネルギー政策」のテーマで講演した。総会で、深川誠氏が同懇話会会長に再任された。(5.16 大会議室)

■放送人政治懇話会

テレビ・ラジオ局の現役・OBらが政治家を招き、定期的に勉強会を行っている。5月は山口那津男公明党代表(5.8)、松野頼久日本維新の会・国会議員団幹事長(5.15)、二階俊博自民党総務会長代行(5.22)、世耕弘成内閣官房副長官(5.29)をゲストに迎えた。

新しいOB会員

■ **大島 敏男** (おおしま としお) 1971年NHK入局。解説委員、経営計画局長などを務め、2008年、NHKサービスセンター理事長。2012年退任。



現役を終えても、やはり時にはナマの声を聴くことが大事と思い、このたび入会させていただきました。

■ **鬼頭 誠** (まこと けいとう) 1976年読売新聞入社。政治部、ワシントン支局、論説委員、調査研究本部など。現在、帝京大学法学部教授。



八王子から日比谷までは遠いのですが、会費に見合う活用をして学生たちにも還元したいと思います。

■ **小林 利光** (こばやし としみつ) 1979年毎日新聞入社。東京本社編集総センター編集部長、『キャンパ』編集長、紙面審査委員など。現在、海上保安協会新聞部次長。



「時の人」たちの記者会見に出席できるのは、ありがたいです。外交問題などを中心に勉強していきます。

■ **森 一夫** (もり かずお) 1972年日本経済新聞入社。日経ビジネス副編集長、日経新聞論説委員、特別編集委員など。



新聞社を卒業しましたが、これまで同様、先入観に極力とらわれず、世の中の動きを素直にみて仕事をしていきたいと思っています。

ゴルフの会 小林 樹 会員が優勝



第99回大会は、絶好のゴルフ日和となった5月13日、浜野ゴルフクラブ(千葉県市原市)に13人が参加して行われました(初参加1人)。

都会の喧噪を離れ、雄大にして繊細さを兼ね備えたこの名門コースを制したのは、小林樹会員(テレビ朝日出身・NET 79)で、第90回に続き2度目の優勝でした。

「今回は次回の100回大会に備えるつもりで参加しましたが、思わぬ優勝に驚いています。同伴者にも恵まれたことが勝因です。次回の記念大会も果敢に挑戦したいと思います」と、カップと副賞のノルウェーサーモン(目録)を手にあいさつしました。

2位は初参加の寺田輝介会員(特別賛助・NET 80)、3位は阿部正夫会員(共同出身・NET 87)でした。

懇親会の席上で前年度の決算報告が承認され、次回の100回記念大会は戸塚カントリークラブで10月25日に開催する予定が発表されました。(小橋敏文)

バー／レストラン／宴会

予約電話 和食 3503-2723 洋食 3503-2766

和食 水無月懐石(6/28まで)

先付：長芋素麺など お椀：鱧葛打ちほか お造り：平日うす造りほか二点 焼物：鮎塩焼き 煮物：冬瓜、茄子など 揚物：稚鮎の香味揚げ 食事：稲庭うどん 水菓子：季節の果物 グラス冷酒付き(5,250円) (板長：大井由光)

洋食 初夏の味覚コース(6/29まで)

稚鮎のフリット・季節野菜のラタトゥイユ、ヴィンソワーズ、オマールテールのカダイフ包み揚げ・サブランリゾット添え、自家製マンゴームース、パン、コーヒー。(土曜日はランチのみ9階レストラン)ご予約をお願いします。(3,675円) (シェフ：黒須修一)

8月は部屋代が半額に お得な個室宴会プランも

洋食8品と和食(そば)でお一人3,000円の8月限定宴会プランを用意しています。1,300円でフリードリンク(2時間)にすることもできます。部屋代はこの期間半額になります。10人で小部屋を利用した場合、部屋代を含め会費5,000円でおつりがきます。同級会や同窓会などプライベートな会合にもお使いください。10～40人までご利用いただけます。

日本新聞博物館 企画展

琉球新報社の報道カメラマン山城博明氏が撮影した、復帰闘争をはじめ沖縄の自然や文化、歴史などの写真約200点を展示した「琉球新報創刊120年企画展 報道カメラマンが見た『激動のOKINAWA42年』」が、8月18日まで開催中です。

☎045-661-2040 <http://newspark.jp/newspark/>

会員社ホール | イベント | 情報

日経ホール▶アンサンブル・ウィーン シュトラウス、ランナーの華やかなウィンナ・ワルツやドイツ舞曲、メヌエットをお楽しみください。

7/4●18時半開演(3,500円)●問い合わせ：☎03-3943-7066●<http://www.nikkei-hall.com/>

サントリーホール▶それいけ！オルガン探検隊<おとなのオルガン探検>「楽器の王様」といわれるオルガンについてもっと知りたい方向けに、そのしくみをより専門的に解説します。

7/21●16時集合(1,000円)●問い合わせ：☎0570-55-0017●<http://suntory.jp/HALL/>

王子ホール▶ミロシュ モンテネグロ生まれのギタリストが再登場。繊細な美音と確かなテクニックを併せもつミロシュの進化した姿にご期待ください。

7/9●19時開演(6,000円)●問い合わせ：☎03-3567-9990●<http://www.ojihall.jp/>

クラブの電話 ダイヤルイン

- 和食レストラン(9階)……………☎3503-2723 ●会員事務……………☎3503-2727
- 洋食レストラン(10階)……………☎3503-2766 ●経 理……………☎3503-2728
- 貸室予約、宴会打ち合わせ……☎3503-2724 ●クラブ行事への申し込み……☎3503-2722
- 受 付……………☎3503-2721 ●会見申し込みアドレス……kaiken@jnpc.or.jp

会員現況

- 法人会員：126社 ●基本会員：732人 ●個人会員：1,408人
 - 法人・個人賛助会員：63社・150人 ●特別賛助会員：90人
 - 名誉・功労会員：11人 ●学生会員：53人
- 計：189社・2,444人

クラブの新しいオリジナルグッズ

便箋とメモ帳ができました

日本記者クラブのマークが入った便箋とメモ帳が完成しました。会場で使用する綴帳と同じデザインに創立年の「SINCE 1969」の文字を加えた表紙でシックな仕上がりとなっています。手紙や会見用のメモ、取材先へのお土産としてもお使いください。便箋は360円、メモ帳は150円(いずれも税込・50枚つづり)です。ラウンジの受付でお求めいただけます。



HP → <http://www.jnpc.or.jp/>

NEW!

■会見詳録 5月のアップロード

アウンサンスーチー ミャンマー(ビルマ)国民民主連盟党首「法の支配から国民の安心感、そして和解へ(日・英)」(2013.4.17)

香田洋二 元自衛艦隊司令官「尖閣問題で我々は何に對しどう備えるべきなのか？」(2013.4.24)

■会員ジャーナル

私の取材余話「ベトナム断想Ⅱ ベトナムの司馬さん」友田錫 元産経新聞記者

<訃報> 尾崎晃一会員(産経新聞出身、72歳)が4月2日虚血性心不全のため、榎彰会員(共同通信出身、79歳)が5月7日呼吸不全のため死去されました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

今後の行事予定(6/4現在)

14(金)	15:00～16:30 10階ホール 著者と語る『新大陸主義』 ケント・カルダー氏
	18:00～20:00 10階ホール 試写会「熱波」
17(月)	15:00～16:30 10階ホール 研究会「憲法96条改正問題」小林節 慶応大学教授
18(火)	18:00～19:35 10階ホール 試写会「スタンリーのお弁当箱」
20(水)	14:00～15:00 宴会場 記者会見 鈴木英敬 三重県知事
21(金)	12:00～14:00 10階ホール 昼食会 クラグストン 駐日カナダ大使

ホームページの「会見カレンダー」で、日時の変更なども含め、最新のクラブ行事をお知らせしています。参加申し込みもカレンダーからできます。

会報委員会

- 委員長＝会田 弘継
委員＝石川莊太郎 大寺廣幸 小西美和子
佐塚 正樹 高橋 茂 中村 史郎
萩谷 順 牧 久 森嶋 幹夫
守田 靖

(事務局：長谷川和子 本庄五月 村田 西)
☎03-3503-2752 FAX 03-3503-7271



ネット選挙解禁をにらんで「ニコニコ動画」のイベントに自民 民主
維新 共産の各党がブースを設けた
4月27日 千葉市美浜区

撮影…青山^{あおやま}
謙太郎^{けんたろう}
(読売新聞東京本社写真部)

新しきも古きもが安倍流？

安倍晋三首相は昨年の総選挙直後に「投票率の上昇につながる」として、今年の参院選からのネット選挙解禁に前向きな姿勢を示した。首相はかねてから会員制交流サイト「フェイスブック」の愛用者という。

ネット選挙解禁には野党も賛同し、4月19日には改正公職選挙法が成立した。政党や候補者によるホームページの更新や短文投稿サイト「ツイッター」、フェイスブックでの発信が選挙期間中も可能となった。これまで「べからず集」とされた公選法の選挙運動の規制に風穴が開いたのは画期的だ。

ネット選挙元年を盛り上げようと、4月27、28両日に千葉市幕張メッセで開かれたのが、動画投稿サイト「ニコニコ動画」によるイベント「ニコニコ超会議2」だった。サプライズ登場したのが安倍首相。インターネット上には「安倍首相がコメ拾い」（コメントを集めた）や「888」（パチパチパチ＝拍手）などネット特有の言い回しの書き込みも多数あった。

安倍さんは意外にも新しもの好き。第1次内閣のときにカタカナ語を多用してひんしゆくを買ったこともあった。他方で日本の伝統にこだわる憲法改正に前向きだった。どこか新しさと古さ、保守と革新が同居しているのが安倍政治のようだ。

(井芹浩文)

2012年度事業報告(要旨)

※全文はホームページに掲載しています

■概観 11党党首討論会など188回の会見を実施

日本記者クラブは2011年4月1日に社団法人から公益社団法人に移行した。2年目となった2012年度は合計188回の記者会見・研究会を開催した。東日本大震災と東電福島第一原子力発電所の事故をうけて2011回の記者会見・研究会を行った2011年度と並び、過去の平均的な回数を上回る多彩な活動を展開した年度になった。

とりわけ、衆議院選挙公示日の4日前となる11月30日に開催した党首討論会は、11党の党首が一堂に会する超大型会見となった。国政選挙時の党首討論会のゲストとしてクラブ史上、最多だった。特設ステージを設置し、新たな綴帳を製作するなど初めてとなる準備に取り組み、討論会の内容は各メディアが詳しく報道した。また、民主党代表選・自民党総裁選の立候補者による討論会も内外の注目を集めた。初めての事業として、「3・11大震災」関連の記者会見・研究会の全文を収録した冊子を作成し、無料で会員に配布するとともに全国の図書館に寄贈し好評を得た。

新たなシリーズ企画を含むプレス会見に試写会、見学会、一般行事のほか、海外取材団、記者研修会などをあわせたクラブ主催会合・行事の総回数は220回、参加者累計1万5642人だった。

I. 公益目的事業① 記者会見

△プレス会見は188回 内外とも多様なゲストを招く▽

東日本大震災と東電福島第一原発事故は、国会事故調や政府事故調のそれぞれの委員長が記者会見や関連の研究会を数多く開催するなど、前年度に引き続き主要テーマであった。また、外国人ゲストによる記者会見は51回と記者会見(86回)の6割を占めた。さらに、文化、スポーツ関係のゲストにも幅を広げ、クラブで初めて、文楽の公演付きの会見を行った。日本記者クラブが2012年度に主催した行

事・会合は、昼食会16回、記者会見86回、研究会・懇談会82回、討論会・共同会見(衆院選党首、民主党代表選候補者、自民党総裁選候補者、都知事選候補者)4回、試写会・上映会21回、見学会、記者研修会、海外取材団、さらに総会記念講演、クラブ賞受賞者記念講演といった一般行事など多岐にわたる。昼食会、記者会見、研究会・懇談会、討論会・共同会見は会合の呼称は異なるが、いずれもオンザレコードの取材・報道対象であるプレス会見であり、計188回に達した。東日本大震災関連の会合が多く過去最高だった2011年度の201回に次ぐ回数となった。諸行事・会合の一覧は別表を参照。

△「領土問題」「サイバーセキュリティ」など新研究会を開く▽

尖閣諸島や竹島の帰属が日中、日韓関係の外交問題に発展する中、「領土問題」研究会を5回行った。警察の誤認逮捕や、政府機関、メディアへのサイバー攻撃などで、サイバーセキュリティへの関心が急速に高まったため、研究会を始めた。シリーズ企画「3・11大震災」は2年目に入り、復旧・復興や日本のエネルギー政策を主なテーマに22回行った。前年度から続く「権力移行期の世界」はフランス、エジプト、米国、中国、韓国の政治指導者が大統領選などで選ばれる前後に10回行った。

△内外の重要なゲスト▽

訪日した外国の大統領3人、首相3人の記者会見を以下のように行った。ルゴ・パラグアイ大統領、カルザイ・アフガニスタン大統領、サチ・コンボ首相、カタイネン・フィンランド首相。また国連や国連機関のトップからは潘基文国連事務総長、グテレス国連難民高等弁務官など6人。カー豪外相やクルシードインド外相を含め、8人の外相会見も行った。

国内では野田政権から、枝野幸男経産相や前原誠司国家戦略経済財政担当相など、安倍政権から、茂木敏充経産相を招いた。また、片桐裕警察庁長官、田中明彦国際協力機構(JICA)理事長、小津博司検事総長、藤崎一郎前駐米大使、丹羽宇一郎前駐中国大使、白川方明日本銀行総裁らも会見した。

福島原発事故関連では、国会事故調の黒川清委員長と、

政府事故調の畑村洋太郎委員長を、それぞれの報告書が発表された直後に招いた。帰村宣言をした福島県川内村の遠藤雄幸村長や、増子輝彦民主党副代表(参院議員)からも復興の現状について話を聞いた。菅直人元首相にも福島原発事故当時の政府の対応について話をしてもらった。海外からは国際原子力機関(IAEA)の天野之弥事務局長を来日の際、招いた。

△スポーツ、文化界からも多様なゲスト▽

スポーツ界からは、元阪神タイガースの金本知憲選手、福田富昭日本レスリング協会会長と吉田沙保里選手、などしこジャパンの佐々木則夫サッカー日本女子代表監督を招いた。文化面では、大阪市の文楽協会への補助金見直し問題を踏まえ、クラブ初の文楽の公演付き会見を行った。歌舞伎座の新開場を前に、中村吉右衛門日本俳優協会専務理事と松竹の迫本淳一社長、安孫子正専務を招いた。これらの会見も、各紙・各局ともニュースとして取り上げた。

「著者と語る」シリーズも幅を広げた。オランダの建築家、レム・コールハースさん、ハーバード大学教授、マイケル・サンデルさん、中国の作家、陳冠中さんから外国からのゲストも注目され、『東京プリズン』の赤坂真理さん、『64(ロクヨン)』の横山秀夫さん、芥川賞を受賞した「abさん」の黒田夏子さんも深いことばで自作を語った。

△衆院選 11党党首討論会▽

クラブ主催の衆院選党首討論会は12回目になったが、過去最多の11党党首を迎えて行った。公示日前日の開催が恒例だったが、野田佳彦首相が公務のため、4日前の11月30日に開催した。離合集散や多党乱立が繰り返され、対象の11党が一堂に会することが確定したのは、開催日前日だった。史上最多となる11人の党首が登壇できるよう、メインステージの向きを変え、そのための特設ステージやカメラステージ、綴帳をつくり、対応した。カメラスペースはこれまでより広くとることができ、過去最多のテレビカメラ、スチルカメラを設置することが可能になった。新聞は12月1日付朝刊で1面や特別ページで詳報。放送はNHKが地上波で終了まで生中継した。民放各局は同日のニュース番組などで取り上げた。CS放送とネット中継でも伝えられた。

〈民主党代表選 討論会〉

野田佳彦代表の任期満了に伴い、民主党代表選に立候補した4人の候補による討論会を9月12日に開催した。民主党は4年連続の代表選討論会の開催となった。NHKが地上波で終了まで生中継し、民放は同日や翌日のニュース番組で紹介した。CS放送とネット中継でも伝えられた。

〈自民党総裁選 討論会〉

谷垣禎一総裁の任期満了に伴い、自民党総裁選の立候補者による討論会を開催した。自民党の総裁選討論会は3年ぶり。民主党代表選討論会3日後の9月15日となった。NHKが生中継し、民放は代表取材の映像などを使い、同日や翌日のニュース番組で紹介した。CS放送とネット中継でも伝えられた。

〈東京都知事選 共同記者会見〉

都知事選は、過去4回は候補者の個別の記者会見を行ってきたが、今回は新機軸として、主要な候補4人を同時に招き11月28日、共同会見を主催した。

〈記者研修会は2年続けて大震災が中心テーマ〉

全国から若手・中堅記者が日本記者クラブに集まり、ジャーナリズムのあり方を考える記者研修会を1998年から毎年開いている。第15回となる2012年度は8月30日、31日の2日間にわたり行った。昨年度に続き東日本大震災を主要テーマとして福島原発事故報道についてパネルディスカッションを行ったほか、「震災報道」現場から見えてくるもの」と題してベテラン記者2人に話を聞いた。このほかソーシャルメディアの取材や活用問題、3年を迎えた裁判員制度もテーマに取り上げた。過去最高の参加者数だった前年度に続き、全国から多数の記者が集まった。前年度同様、非会員社の参加も受け入れた。参加は68社99人（会員社54社83人／非会員社14社16人）。

〈過去最多26人が参加した海外取材団〉

フィンランドとデンマークへ派遣

海外取材団は2000年度からスタートし、2012年

度は北欧のフィンランドとデンマークを選んだ。両国のエネルギー事情取材が目的で、フィンランドでは原発と高レベル放射性廃棄物の処分場、デンマークでは風力発電を主とした再生可能エネルギーの取材を中心に行った。過去最多の23社26人が参加した。全国紙だけでなく、原発立地県などを中心に地方紙が12社14人、地方局が3社3人と、地方メディアが6割を占めた。参加した記者は、長期連載企画や大型記事、社説などで取り上げ、テレビもニュース番組で現地レポートとして放送した。

〈大震災関連会見を収録した冊子を初めて発行〉

「3・11大震災」のシリーズ会見と増田寛也元総務相・前岩手県知事の日本記者クラブ2011年度総会記念講演を合わせ21回分の会見記録を無料の冊子にまとめ、8月に発行した。公益事業の一環として12年度に初めて行った。3200部を発行し、クラブ会員のほか、都道府県知事・政令都市市長や公立図書館、大学のメディア学科などに届けた。会見直後に文字記録にまとめ、ホームページで「会見記録」として公開したものを、読みやすく記録としても残せるように一冊にまとめた。

〈会見記録は43本を追加〉

記者会見の中でも、文字記録版として残してほしいという要望が強いものについて会見の全文記録を作成し、ホームページに「会見記録」のタイトルで公開している。2012年度は開催した188の会合のうち、2割強にあたる43件の会見記録を新たに公開した。

II. 公益目的事業② 日本記者クラブ賞

〈46人目のクラブ賞と初の特別賞〉

大震災報道を代表する3者に

2012年度の日本記者クラブ賞は、毎日新聞記者（東京本社社会部部長委員）の萩尾信也氏に贈った。初の日本記者クラブ賞特別賞は、福島中央テレビ報道制作局（福島県郡山市）と石巻日日新聞（宮城県石巻市）に贈った。3者はいずれも東日本大震災で日本のジャーナリズムを代表する報道と

して高く評価された。

贈賞理由は以下の通り。萩尾氏「東日本大震災直後から岩手県三陸沿岸に住み込み被災した人々の記録『三陸物語』を毎日新聞にひとり2011回連載した。被災者それぞれのあの日のすさまじい体験。愛する家族を失った悲しみ。揺れ動く心と思い。そして生きる意味を見出す再生への過程を、方言を生かした文章で伝えた」

福島中央テレビ「東京電力福島第一原発事故で1号機が水素爆発した瞬間をメディアで唯一、撮影し速報した。映像を見て多くの住民が緊急避難した。この放送がなければ、市民も政府も水素爆発を知らずに危険な時間が過ぎてしまったかもしれない。原発神話の崩壊を日本と世界に示した映像でありテレビ・ジャーナリズムの使命を果たした報道である」

石巻日日新聞「社屋が被災し新聞発行ができないう事態に陥りながらも、6日間、手書きの壁新聞を作り避難所にニュースを届けた。日本の報道史に残る壁新聞作りであり、極限状況の中、新聞の原点に立ち返った報道である」

6月15日、萩尾信也氏と福島中央テレビを代表して佐藤崇報道制作局長、石巻日日新聞を代表して武内宏之常務取締役報道担当の3者による受賞記念講演会「3・11大震災」あの時、そして今を行った。この講演会は、萩尾氏がかつて取材した聴覚障害児たちの希望にこたえ、クラブとして初めて手話と文字通訳付で行った。クラブ会員だけでなく一般の方も参加した。

III. 公益目的事業③ 日本記者クラブ会報とインターネットによる情報開示

〈特別企画、紙面刷新続く クラブ会報の発行〉

前年度に続き日本記者クラブ会報は紙面刷新を続けた。「沖縄本土復帰から40年」「日中国交正常化から40年」の年であることを受け、特別企画を計4本掲載した。座談会「特派員が語る日中40年」では、中国特派員を経験したOB会員と現役記者が、尖閣諸島問題で揺れる日中関係や中国報道について語り合った。空前の大取材団だった田中訪中に同行したOB記者たちの同行秘話も紹介した。また、フェイ

スブックやツイッターなどソーシャル・ネットワーキング・サービス(SNS)を活用する会員社の動きや海外メディアの最新の動きを報告する特集「SNS戦略」も掲載した。年度の平均ページ数は27ページだった。2013年1月号から、会報の印刷会社を変更し、レイアウトの一部見直しも行った。

〈会見動画195本加わるフェイスブック、ツイッターも始めるホームページ〉

日本記者クラブのホームページ(www.jnc.or.jp)はリニューアル作業を継続した。2012年8月からはSNS活用をスタート。フェイスブック、ツイッターで動画配信、会見記録、会報、会員エッセーなどホームページの更新情報を知らせた。

YouTubeにある日本記者クラブ専用チャンネルに記者会見の動画をアップする事業も続けた。2012年度は195本を新たにアップした。合計631本のほり、会見の全容にいつでもアクセスできる重要なアーカイブとなっている。

尖閣諸島上陸事件以降、報道でたびたび引用された鄧小平中国副首相の「尖閣棚上げ」発言は、1978年10月25日に行われた日本記者クラブでの会見だった。歴史の記録として、その会見の音声データもYouTubeにアップし、クラブ会報2012年10月号に該当の発言全文を再録した。会員の記者が報告する「会見リポート」194本を新たに掲載した。

IV. 収益事業

〈事業収益は前年並み〉

2012年度に会員がクラブの施設を利用して行った会合は1120件で、2011年度を若干下回った。理事会(10月29日)は、施設運営委員会から上申のあった、9階の貸室料の改定案を承認し、2013年4月1日から新料金を適用することを決めた。

V. 日本記者クラブの運営

〈杉田、北村両元理事長が名誉会員に 理事会〉

第518回理事会(5月28日)は住田良能(産経新聞)、今井環(NHK)の両副理事長の退任にともない、それぞれの後任である飯塚浩彦理事(産経新聞取締役東京編集局長)と、石田研一理事(NHK理事・放送総局長)の両氏を副理事長に選定した。

第519回理事会(6月22日)は、第12代理事長の杉田亮毅さん(日本経済新聞)と第13代理事長の北村正任さん(毎日新聞)を名誉会員に推薦することを決定。後日、両氏に名誉会員証が手渡された。

第516回理事会(4月19日)は特別賛助会員の入会を促進するため、NGOの代表者、広報担当者に対して、法人賛助会員も含めて入会金を1年間免除することを決定した。

〈減少傾向が続く会員〉

日本記者クラブの会員はプレス会員(法人会員、基本、個人A、個人B、個人C、個人D)と賛助会員(法人賛助、個人賛助、特別賛助)に分けられる。会員の負担する会費はクラブの全収入の83%を占める。特にプレス法人会員は、全収入の約半分にあたる会費を負担する一方、社員総会を構成する。全国の報道機関がクラブの財政と運営に責任を負う仕組みになっている。

会員数の減少は2012年度も続いた。クラブの基盤であるプレス法人会員の退会はなかったものの、個人登録されたプレス個人会員は29人減少した。

2013年3月1日現在の会員数は以下の通り。カッコ内は2012年4月との比較。

【プレス会員】	
法人会員	126社 (0社)
基本会員	734人 (3人減)
個人A会員	388人 (3人増)
個人B会員	53人 (4人減)
個人C会員	95人 (16人減)
個人D会員	883人 (9人減)

【賛助会員】

法人賛助会員	66社 (0社)
個人賛助会員	128人 (1人減)
特別賛助会員	32人 (3人減)
その他の会員	90人 (3人増)
名誉・功勞会員	11人 (1人増)
学生会員	56人 (13人増)
合計	192社 (0社)
	2470人 (16人減)

(*学生会員を除くと29人減)

〈アジア太平洋プレスクラブ協会へ加盟〉

第524回理事会(10月29日)において、香港の外国特派員クラブ、オーストラリアのナショナル・プレスクラブ、シンガポールのプレスクラブの3者がよびかけて設立する、アジア太平洋プレスクラブ協会(APPC)への加盟を決定した。参加したのはナショナル・プレスクラブ2(オーストラリア、日本)、特派員クラブ5(香港、上海、クアラルンプール、ソウル、台北)。参加表明しているのはナショナル・プレスクラブ4(ニュージランド)、シンガポール、モンゴル、ネパール)、特派員クラブ4(北京、ジャカルタ、シンガポール、バンコク)。

〈好評の「賛助会員の会」を2回開催〉

法人賛助会員、個人賛助会員、特別賛助会員を対象にした「賛助会員の会」を開催した。クラブ企画委員の各社のベテラン記者が関心の高い時事問題や取材・報道のありかたを語り、好評の会合となっている。2012年度は2回開催した。また、2011年度初めて開催して好評だった法人会員各社の外信部・国際部記者と特別賛助会員(主に各国大使館や国際機関の広報担当者)の懇談会「賛助会員と記者との集い」を11月13日に開催した。

※「評」はホームページに会見詳録を掲載

日付 参加者 記録

一般行事 4回

総会記念講演 三谷太一郎 東京 大学名誉教授	5月28日	131	評
会員懇親会	5月28日	123	評
クラブ賞・同特別賞受賞記念講演 会 萩尾信也 毎日新聞記者、佐藤崇 福島中央テレビ報道制作局長、武内宏之 石巻日日新聞常務取締役報道担当	6月15日	210	評
新年互礼会員懇親会	1月18日	202	評

昼食会 16回

片桐裕 警察庁長官	5月7日	77	評
横倉義武 日本医師会会長	5月16日	60	評
井上弘 日本民間放送連盟会長	5月21日	64	評
国分良成 防衛大学校長	5月30日	68	評
エヴゲーニー・アフアナシエフ 駐日ロシア大使	6月6日	105	評
田中明彦 国際協力機構(JIC) A)理事長	6月13日	53	評
山岸憲司 日本弁護士連合会(日 弁連)会長	6月19日	40	評
開沼博 福島大学特任研究員(記 者研修会)	8月30日	151	評
御厨貴 公文書管理委員会委員長 (記者研修会)	8月31日	116	評
小津博司 検事総長	10月3日	75	評
藤崎一郎 前駐米大使	11月19日	76	評
ディールパ・ゴバラン・ワドワ 駐 日インド大使	11月21日	62	評
武藤正敏 前駐韓国大使	12月5日	53	評
サルバトーレ・アンジェレラ 在 日米軍司令官	12月6日	103	評

丹羽宇一郎 前駐中国大使
齊藤惇 日本取引所グループCEO

討論会・共同会見 4回

民主党代表選立候補者討論会 野田佳彦、赤松広隆、原口一博、鹿野道彦(届け出順)	9月12日	273	評
自民党総裁選立候補者討論会 安倍晋三、石破茂、町村信孝、石原伸晃、林芳正(届け出順)	9月15日	243	評
東京都知事選立候補予定者共同記者会見 猪瀬直樹、宇都宮健児、笹川堯、松沢成文(50音順)	11月28日	127	評
11政党首討論会 野田佳彦・民主党代表、安倍晋三・自由民主党総裁、嘉田由紀子・日本未来の党代表、山口那津男・公明党代表、石原慎太郎・日本維新の会代表、志位和夫・日本共産党委員長、渡辺喜美・みんなの党代表、福島瑞穂・社会民主党首、鈴木宗男・新党大地・真民主代表、自見庄三郎・国民新党代表、舛添要一・新党改革代表(議席数順)	11月30日	303	評

記者会見 86回

リヤード・マリキ バレスチナ自治政府外相	4月12日	34	評
ミヒヤエル・フックス ドイツ与 党会派副議長	4月20日	23	評
マイケル・ウッドフォード 元オ リンパス社長	4月20日	91	評
グエン・タン・ズン ベトナム首相	4月21日	65	評
嘉田由紀子 滋賀県知事(シリー ズ企画「3・11大震災 原発再稼働問題」)	5月8日	95	評
トロン・ギスケ ノルウェー貿易・ 産業相	5月11日	34	評
谷垣禎一 自民党総裁	5月14日	132	評

セルダル・クルチ 駐日トルコ大使
ポプ・カー オーストラリア外相
ピーター・ブッカー ヒューマン・
ライツ・ウォッチ緊急対応部門
ディレクター

瓦礫を活かす森の長城プロジェクト 細川護熙理事長、宮脇昭副理 事長、佐藤可土和理事、澁澤寿一 理事、ロバート・キャンベル理事、 倉本聰評議員、富木田道臣顧問、 川瀬修平監事、新川眞事務局長	5月25日	83	評
山田啓二 京都府知事(シリーズ 企画「3・11大震災 原発再稼働 問題」)	5月28日	61	評
アーサリン・カズン 国連世界食 糧計画事務局長	5月29日	33	評
ロブ・デービス 南アフリカ貿易 産業相	5月29日	19	評
フェルナンド・ルゴ・メンデス パラグアイ大統領	5月30日	42	評
ハシム・サチ コソボ首相	6月8日	44	評
クロド・ヘレル 駐日メキシコ大使	6月14日	35	評
ラファイック・アブデッサレーム チュニジア外相	6月26日	23	評
ミロスラフ・ライチャーク スロ バキア副首相・外相	6月28日	18	評

東北未来創造イニシアティブ 大 滝精一・東北大学経済学部長、大 山健太郎・東北ニュービジネス協 議会会長、池田弘・日本ニュービ ジネス協議会連合会会長、石川治 江・NPO法人ケアセンターやわ らぎ(在立川市)代表理事、北城裕 太郎・日本IBM相談役、米谷春 夫・マイヤ(在大船渡市)社長、増 田寛也・野村総研顧問、松田昌士・ JR東日本顧問、野田智義・NP Oアイ・エス・エル理事長	7月3日	55	評
ガミミニ・ラクシユマン・ピーリ ス スリランカ外相	7月4日	48	評

黒川清 東京電力福島原子力発電 所事故調査委員会(国会事故調委 員長(シリーズ企画「3・11大震災」))	7月6日	108	詳	ババトウンデ・オシヨテイメイ ン 国連人口基金(UNFPA)事務局長 アルワ・スレイマン カタール財 団 学生支援局長	10月1日	54	詳	マリア・ファンデルフーフェン 国際エネルギー機関(IEA)事務 局長	11月22日	74	詳
潘基文 国連事務総長	7月8日	90	詳	遠藤哲也 一橋大学客員教授(元 原子力委員会委員長代理)(シリ ーズ企画「3・11大震災」)	10月4日	84	詳	アナンド・グローバー 国連人権 理事会特別報告者	11月26日	65	詳
ハミド・カルザイ アフガニスタ ン大統領	7月9日	86	詳	ヴォルフガング・シヨイブレ ド ヴォルフガング・シヨイブレ ド ヴツ財務相	10月11日	123	詳	駒野欽一 前駐イラン大使	12月4日	47	詳
野口元郎 クメール・ルージュ 判最高審判事	7月12日	39	詳	スタンレー・フィッシュャー イスラエル中央銀行総裁	10月11日	28	詳	ソム・ミッタール インドソフトウ ェアサービス協会会長	12月7日	18	詳
石井菜穂子 財務省副財務官(地 球環境フアシリテイー最高経営責 任者)	7月17日	25	詳	エレン・ジョンソン・サーリーフ リベリア大統領	10月12日	51	詳	ペドロ・メドラノ 国連世界食糧 計画(WFP)事務局次長代行	12月13日	23	詳
胡光宇・道紀忠華シンクタンク 総裁、後藤錦隆・日本支社首席代表	7月20日	48	詳	枝野幸男 経済産業相	10月15日	89	詳	桐竹勘十郎 文楽人形遣い	12月17日	78	詳
ダニエル・ポネマン 米エネルギー 省副長官	7月24日	70	詳	米国人元戦争捕虜	10月16日	18	詳	天野之弥 国際原子力機関(IA EA)事務局長	1月11日	95	詳
畑村洋太郎 東京電力福島原子力 発電所における事故調査・検証委 員会(政府事故調)委員長(シリ ーズ企画「3・11大震災」)	7月25日	138	詳	ファトゥ・ベンソダ 国際刑事 裁判所(ICC)検察官	10月17日	31	詳	茂木敏充 経済産業相	1月21日	98	詳
ヴォロディミル・ホローシャ ウクライナ非常事態省立入禁止区 域庁長官	7月26日	52	詳	ヴァイリー・ソウンダール デンマーク外相	10月22日	24	詳	富田哲郎 JR東日本社長	1月23日	82	詳
唐池恒二 JR九州社長	8月1日	61	詳	下地幹郎 郵政民営化・防災担当 相	10月22日	35	詳	白川方明 日本銀行総裁	1月25日	163	詳
菅直人 前首相	8月8日	193	詳	マイケル・クラーク 英国王立防 衛安全保障研究所(RUSI)所 長、サー・ジョン・スカールレ ット シニア・アソシエイト・フ ェロー、	10月23日	66	詳	アントニオ・グテレス 国連難 民高等弁務官	2月6日	34	詳
佐藤和孝 ジャパンプレス代表	9月4日	91	詳	シヨナサン・エヤル 国際安全保 障部長、アレキサンダー・ニ ール 国際安全保障部アジア 研究グループ所長	10月23日	66	詳	山口那津男 公明党代表	2月8日	97	詳
ユルキ・カタインン フィンラン ド首相	9月5日	79	詳	ギョスター・フェアホイゲン 前欧州委員会副委員長	10月31日	24	詳	ミヒヤエル・マイスター ドイツ下院議員	2月8日	27	詳
コステイ・マニベ・ンガイ 南ス ーダン財務・経済計画相	9月5日	21	詳	前原誠司 国家戦略・経済財政担 当相	11月5日	138	詳	加藤紘一 元自民党幹事長(日中 友好協会会長)	2月13日	94	詳
今田高俊 東京工業大学大学院教 授(シリーズ企画「3・11大震災 放射線廃棄物」)	9月21日	66	詳	神美知宏 ハンセン病市民学会共 同代表(全国ハンセン病療養所入 所者協議会会長)、遠藤隆久 同 事務局長	11月8日	25	詳	カピル・シバル インド通信・情 報技術相	2月14日	35	詳
				ミチエル・バチエレ UNウイメ ン事務局長	11月13日	45	詳	リヤード・マリキ パレスチナ自 治政府外相	2月15日	21	詳
								福田富昭 日本レスリング協会会 長、吉田沙保里 選手	2月20日	105	詳
								遠藤雄幸 福島県川内村村長、増 子輝彦 民主党副代表(参議院議 員、福島県出身)(シリーズ企画 「3・11大震災」)	2月21日	61	詳
								サアド・アル・カタートニー エジプト自由公正党党首	2月22日	26	詳

ヤン・エリアソン 国連副事務総長	2月28日	38
黒川清 元東京電力福島原子力発電所事故調査委員会(国会事故調)委員長(シリーズ企画「3・11大震災」)	3月8日	91
北澤宏一 東京電力福島原子力発電所事故に関し国会及び政府に設けられた委員会の提言のフォローアップに関する有識者会議座長(シリーズ企画「3・11大震災」)	3月8日	71
内部被曝問題研究会 沢田昭二・理事長(名古屋大学名誉教授)、矢ヶ崎克馬・副理事長(琉球大学名誉教授)、生井兵治・常任理事(筑波大学名誉教授)、松崎道幸・会員(北海道深川市立病院医師)(シリーズ企画「3・11大震災」)	3月11日	48
ハウエル・世界経済フォーラム・マネージング・ディレクター、土屋聡・同日本代表	3月12日	44
細野豪志 民主党幹事長	3月13日	78
フォルカー・シユタンツェル 駐日ドイツ大使、クリスチャン・マセ 駐日フランス大使	3月15日	44
迫本淳一・松竹社長、安孫子正・松竹専務、中村吉右衛門・日本俳優協会専務理事	3月18日	112
ステイブ・シユルズベリー 在日米軍法務部長	3月22日	38
佐々木則夫 サッカー日本女子代表監督	3月25日	59
パウロ・ポルタス ポルトガル外相	3月27日	18
サルマン・クルシード インド外相	3月27日	46
マリ・パンゲストウ インドネシア観光・クリエイティブエコノミー相	3月29日	18

研究会・懇談会 82回

石井彰 エネルギー・環境問題研究所代表(シリーズ企画「3・11大震災 エネルギー論」)	4月3日	43
---	------	----

瀨畑源 一橋大学大学院特任講師(著者と語る『公文書をつかう 公文書管理制度と歴史研究』)	4月12日	32
李鍾元 早稲田大学大学院アジア太平洋研究科教授(権力移行期の世界4 韓国)	4月13日	61
土佐桂子 東京外国語大学大学院教授(ミヤンマー3)	4月17日	44
荒井聡 民主党原発事故収束対策プロジェクトチーム座長(シリーズ企画「3・11大震災」)	4月18日	79
渡邊啓貴 東京外国語大学教授(権力移行期の世界5 フランス)	4月19日	48
デービッド・ストラウブ 元米国務省朝鮮部長(囲む会)	4月20日	55
久保文明 東京大学教授(権力移行期の世界6 米国)	4月25日	77
村田奈々子 法政大学講師(著者と語る『物語 近現代ギリシヤの歴史 独立戦争からユーロ危機まで』)	4月25日	65
橋川武郎 一橋大学大学院教授(シリーズ企画「3・11大震災 エネルギー政策」)	5月11日	65
マイケル・マクデビット 米海軍分析センター上級研究員(囲む会)	5月15日	59
モハウ・ペコ 駐日南アフリカ大使(囲む会)	5月15日	32
レム・コールハース オランダ人建築家(著者と語る『プロジェクト・ジャパン メタボリズムは語る』)	5月17日	28
植田和弘 京都大学大学院教授(シリーズ企画「3・11大震災 エネルギー政策」)	5月22日	62
ケン・シーガル 広告クリエイティブ・ディレクター(著者と語る『Think Simple アップルを生み出す熱狂的哲学』)	5月24日	38

マイケル・サンデル ハーバード大学教授(著者と語る『それをお金で買いますか』)	5月26日	93
東京都防災会議地震部会 平田直・部会長(東京大学地震研究所教授)、中林一樹・副部会長(明治大学大学院特任教授)(首都直下地震の被害想定と対策)	6月4日	111
黒沼ユリ子 バイオリニスト(囲む会)	6月7日	36
遠藤誉 東京福祉大学国際交流センター長(権力移行期の世界7 中国)	6月11日	85
エラルド・エスカラ 駐日ヘル大使(囲む会)	6月12日	31
浅田均 大阪維新の会政調会長(大阪府議会議長)(大阪維新の会1)	6月12日	106
加藤隆俊 国際金融情報センター理事長(欧州経済1)	6月13日	79
平松邦夫 前大阪市長(大阪維新の会2)	6月14日	52
四宮啓 弁護士(検察審査会制度)	6月18日	42
本間正義 東京大学大学院教授(TPP9)	6月20日	63
池内恵 東京大学先端科学技術研究センター准教授(権力移行期の世界8 エジプト)	6月29日	47
竹森俊平 慶応大学教授(欧州経済2)	7月11日	103
與那覇潤 愛知県立大学准教授(著者と語る『中国化する日本』)	7月13日	55
六車由実 民俗学者・特別養護老人ホーム介護職員(著者と語る『驚きの介護民俗学』)	7月25日	33
成田憲彦 駿河台大学教授(二大政党と選挙制度のあり方)	7月30日	78

詳細	詳細	詳細	詳細	詳細	詳細	詳細	詳細	詳細	詳細	詳細	詳細	詳細	詳細	詳細	詳細	詳細	詳細	詳細	詳細	詳細	詳細
----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----

中野三敏 九州大学名誉教授(著者と語る『江戸文化再考 これからの近代を創るために』)	8月20日	51	詳	石郷岡建 日本大学教授(領土問題3 北方領土)	11月19日	55	詳	柯隆 富士通総研経済研究所主席研究員(2013年経済見通し1)	1月9日	116	詳
木村哲 エイス予防財団理事長(日IV/エイズ)	8月28日	22		興梠一郎 神田外語大学教授(権力移行期の世界11 中国)	11月27日	86	詳	浜矩子 同志社大学大学院教授(2013年経済見通し2)	1月15日	120	詳
赤阪清隆 前国連広報担当事務次長(囲む会)	9月6日	34		陳冠中 中国人作家(著者と語る『しあわせ中国 盛世2013年』)	12月3日	61		ロバート・フェルドマン モルガン・スタンレーMUFG証券 マネージング・ディレクター チーフエコノミスト兼債券調査本部長(2013年経済見通し3)	1月15日	96	
五野井郁夫 高千穂大学准教授(デモと民主主義)	9月6日	37		石川幸憲 在米ジャーナリスト(世界の新聞・メディア17)	12月4日	58		岩田一政 日本経済研究センター理事長(2013年経済見通し4)	1月16日	133	詳
加藤朗 桜美林大学教授(シリア)	9月7日	52		田中伸男 前国際エネルギー機関(IEA)事務局長(日本エネルギー経済研究所特別顧問)(シリーズ企画「3・11大震災 エネルギー政策」)	12月5日	39		深川由起子 早稲田大学教授(権力移行期の世界13 韓国)	1月16日	85	
柏木孝夫 東京工業大学特命教授(シリーズ企画「3・11大震災 エネルギー政策」)	9月25日	46		朱建榮 東洋学園大学教授(領土問題4)	12月6日	75		土屋大洋 慶応大学大学院教授(サイバーセキュリティ1)	1月25日	82	
豊田正和 日本エネルギー経済研究所理事長(シリーズ企画「3・11大震災 エネルギー政策」)	9月27日	51		赤坂真理 作家(著者と語る『東京ブリズン』)	12月10日	43		横山秀夫 作家(著者と語る『64』)	2月1日	77	
橋山禮治郎 千葉商科大学大学院客員教授(著者と語る『必要か、リニア新幹線』)	10月24日	52		早野透 桜美林大学教授(元朝日新聞コラムニスト)(著者と語る『田中角栄』)	12月12日	60		松原実穂子 サイバーセキュリティ・アナリスト(パシフィックフォーラムCSIS客員研究員)(サイバーセキュリティ2)	2月4日	65	
保阪正康 ノンフィクション作家(領土問題1)	10月25日	114		奥蘭秀樹 静岡県立大学准教授(権力移行期の世界12 韓国)	12月13日	55		前田雅英 首都大学東京大学院教授(サイバーセキュリティ3)	2月5日	66	
加藤昌男 元NHKアナウンサー(著者と語る『テレビの日本語』)	10月25日	41		坂元茂樹 神戸大学大学院教授(領土問題5)	12月14日	52		ジャック・ルイリリー AFP通信東京支局長(北・西アフリカ情勢)	2月6日	60	
東郷和彦 京都産業大学客員教授(領土問題2)	11月6日	94	詳	松本正生 埼玉大学教授(衆院選後の日本―民意をどう読むか1)	12月19日	93	詳	黒田夏子 作家・芥川賞受賞者(著者と語る『abさん』)	2月15日	54	
中山俊宏 青山学院大学教授(権力移行期の世界9 米国)	11月9日	66		待鳥聡史 京都大学大学院教授(衆院選後の日本―民意をどう読むか2)	12月21日	67		梶山恵司 富士通総研経済研究所 上席主任研究員(シリーズ企画「3・11大震災 日独エネルギー政策の比較」)	2月18日	57	
高橋伸彰 立命館大学教授(著者と語る『テインズはこう言った』)	11月9日	55	詳	喜田宏 北海道大学教授、渡辺彰 東北大学教授(インフルエンザ)	12月21日	38		赤坂憲雄 学習院大学教授(シリーズ企画「3・11大震災 東北学」)	2月18日	58	
カマル・ガバラ エジプト・アラアハラム紙編集主幹(囲む会)	11月12日	46		谷口将紀 東京大学大学院教授(衆院選後の日本―民意をどう読むか3)	12月26日	58		ベルナルド・ヴォシヨン フランス大統領領府・エリゼ宮殿料理長、クリスチャン・ガルシア モナコ公国・モナコ宮殿料理長、ジル・ブラガール クラブ・デ・シエフ・デ・シエフ創設者(囲む会)	2月19日	44	詳
山口洋一 元ミャンマー大使(著者と語る『歴史物語ミャンマー』)	11月14日	35		金本知憲 元阪神タイガース選手(囲む会)	12月27日	77					
渡部恒雄 東京財団上席研究員(権力移行期の世界10 米国)	11月16日	41									

竹田敏一 福井大学附属国際原子 力工学研究所所長(シリーズ企画 「3・11大震災」原子力研究開発 の現状 大学の現場から)	2月20日	41
田河慶太・内閣官房新型インフル エンザ等対策室室長、岡部信彦・ 政府有識者会議委員(インフルエ ンザ2)	2月25日	27
鈴木岩弓 東北大学大学院教授 (シリーズ企画「3・11大震災」東 北大学宗教学講座)	3月4日	35
桑山紀彦 心療内科医(シリーズ 企画「3・11大震災 心のケア」)	3月5日	33
船橋洋一 日本再建イニシアティ ブ理事長(著者と語る「カウンタ ウン・メルトダウン」)	3月7日	66
ロペール・ボワイエ 米州研究所 (バリ)エコノミスト(著者と語る 「ユーロ危機 欧州統合の歴史と 政策」)	3月8日	29
ミア・ディッキー FT紙前東 京支局長(囲む会)	3月26日	59
北欧取材団 フィンランド・デンマーク (1月13日〜21日) 参加26人		
フィンランド 見学 オルキオト原子力発電所 3号機工事現場、オンカロ(放 射性廃棄物処分場)	1月14日	
デンマーク 見学 ミデルグレン洋上風力発 電パーク	1月18日	
デンマーク リデゴー 気候エネルギー建設 相 記者会見	1月17日	

見学 風力発電技術者養成学校 ヴェスタゴー ロラン市長、ク リステンセン ロラン市議 記 者会見	1月19日	
見学会 2回		
JR東京駅丸の内駅舎 歌舞伎座	9月24日 3月25日	100 110
試写会・上映会 21回		
相馬看花 第一部 奪われた土地 の記憶	4月16日	67
道々白磁の人々	5月16日	99
死刑弁護人	6月5日	105
The Lady ひき裂かれた愛	6月18日	160
セブン・デイズ・イン・ハバナ	7月11日	102
女優	7月20日	102
ニッポンの嘘 報道写真家 福島 菊次郎 90歳	7月23日	44
木村栄文ドキュメンタリー デンジャラス・ラン	8月1日 8月10日	43 180
LOVE 沖縄@辺野古、@高江	8月31日	94
難民映画祭 記者発表・試写会(U NHCR 駐日事務所主催)	9月5日	44
生き抜く 南三陸町 人々の一年	9月26日	72
3D 東日本大震災 疾走!相馬 野馬追〜東日本大震災を越えて〜 テロリズムとケバブ	10月9日 10月20日	88 65
東京原発	11月1日	105
東京家族1回目	12月14日	151
東京家族2回目	12月14日	120
100年の餅(こだま) 大逆事件 は生きている	12月21日	54
約束 名張毒ぶどう酒事件 死刑 囚の生涯	1月31日	95

舟を編む リンカーン	3月26日 3月29日	203 320
記者研修会 参加99人		
開沼博 福島大学特任研究員(原 子力ムラのいま)	8月30日	
パネルディスカッション「福島原 発事故から1年半―地元メディア の視点―五十嵐稔・福島民報編 集局報道部副部長、小野広司・福 島民友編集局報道部長、佐藤崇・福 島中央テレビ報道制作局長		
「ソーシャルメディアへの取り組 み」橋本聡・朝日新聞神戸総局長 (前編集担当補佐)、田中明良・N HKネット報道部長	8月31日	
四宮啓 弁護士(裁判員制度施行 から3年―現状と課題)		
御厨貴 公文書管理委員会委員長 保阪正康 ノンフィクション作家 (昭和史からみた現代―東日本大 震災後の日本を問う)		
「震災報道―現場取材からみえて くるもの」萩尾信也・毎日新聞社 会部部長委員(2012年度日本 記者クラブ賞受賞者)、外岡秀俊・ ジャーナリスト(元朝日新聞編集 局長)		
賛助会員の会 3回		
西川孝純 共同通信特別編集委員 「野田内閣と解散・総選挙の行方」 賛助会員と記者の集い	8月3日 11月13日	42 60
坂東賢治 毎日新聞編集編成局次 長「習近平の中国」	11月29日	34
趣味の会 11回		
囲碁の会(4/21 5/19 6/23 10/27 11/10 12/15)	7/21	
2013年1/26 2/23 3/16	9/29	
ゴルフの会(5/10 10/30)		

詳

詳